メモ書き「いのちに出会う保育」

檜智仁素（山田利行）2021.3

〈いのちに出会う〉は
〈ともだちに出会う〉と同じ
そして、〈ともだち〉は
むし、はな、水、砂、……
みる、さわる、きこえる、
……のすべて

色（しき） 空（くう） 花（か）
星（せい） 香（か） 緑（りょく）
火（か） 風（ふう） 命（めい）
光（こう） 食（しょく） 水（すい）

献辞

おひさまぐみ、ばらぐみ、
ゆりぐみ、かぜぐみの おとなを、
3歳児クラスの おとなを、
あかちゃんから 1歳児、2歳児クラスの おとなを、
そして、
幼いこどもに付き添っている多くの おとなを、
思い浮かべてこの小冊子を書き表します。

はじめに

命題「いのちを子どもに（気づかせたい）」に応えて

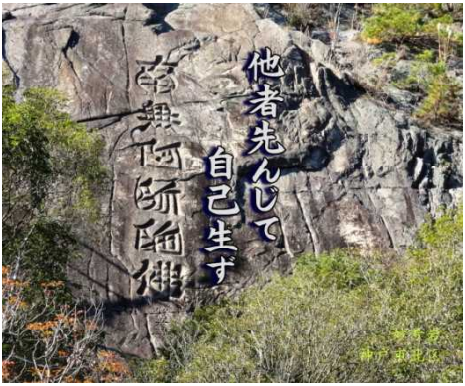
野外体験活動保育マニュアルには、3つの目的「五感・生命（いのち）・共感」を掲げている。乳幼児が、生活や遊びを通して、あるいは自身の成長において、体験活動にどういう意味（目的）をもたせればよいのだろうと私はずっと考えている。わからないことは多い。その謎解きをしながら、保育の現場や、もう少し年長の子どもたち（小学生）と実践を重ねている。

2020年のある時期から「心の理論」に関心が向いた。一方、野外活動にかかわるようになった当初、園長から「いのちを子どもに（気づかせたい）」と命題をいただいていた。さらに〈自然教室〉というかたちを思いつきその実践を始めた1970年代前半から活動中心テーマのひとつは「いのちの発見」であった。それからの歳月を数えると、50年をかけて《いのち》という大きなテーマについて、やっと語れそうな糸口が見えて来た。

じつは、こうした謎解きは上記のような時系列ではない。極めて個人的なことで、私は「死とは何か」について考えていた。2020年で私は70歳になった。十分に元気で、園の野外活動では2日連続の山歩きも平気だ。でもいずれは店仕舞がやってくる。このことを考えていると**「他者」の存在が先で、他者の発見が自己につながる**ことを「心の理論」で学んだ。（あれっ！）と驚いた。乳幼児は、他者に促されて自己を発見する。他者を切り離して「死」は存在しない。生と死は、いずれも他者で規定されるのだ！

「メモ書き」を冠した意味

「いのち」に対するいただいた命題に向き合える準備ができたような気がする。とはいえ、哲学者でもないし、倫理や宗教学者でもないし、心理学や認知科学者でもない。シロートに過ぎないから「メモ書き」を冠し、正確を欠いたりや認識誤りに陥るかもしれないと断った上で、複雑だし備忘のために――と弁解をいっぱいしながらも、私なりに「いのち」について辿りついた知見を記そう。



もくじ

6 … ことの起こり

巻末… 野外における体験活動保育
運用指針（ひな形マニュアル）

運用指針　目的
五感）　生得的五感をより育み、知的発達を促す。
生命）　いのちと触れ合い、美と躍動と調和を体験することで畏敬の念を育み、向上をめざす意欲を身につける。
共感）　ひとは野生のいのちとともにあり、互いに共感し分かち合い、多様な価値を受けいれられる心を養う。

8 … 友達（他者）の心を読む能力 ――「心の理論」
11 … あかちゃんの心
(1)「共感する」は生得的らしい
(2) 間主観性 かんしゅかんせい
(3) ミラーニューロンの発見 1996年
13 … 乳児の保育環境といのち
15 … 他者の発見が、自己を確かにする
17 … いつからおとな？――で、遊びを考える
24 … 「子ども期／おとな期」対照図
25 … 年齢（学年）による発達段階
26 … 《3つの体験》& ハートスケール

▼実践編▼▼

38 … 野外体験活動保育の実際とその評価
40 … 目線の高さで飛び降りる5歳児
44 … 階段道（かいだんみち）

49 … いのち の かたち for child
52 … 保育室や園庭の環境
54 … いきものを飼う・育てる
57 … 園庭の、いきもの環境
59 …「食べる」ということ
60 … 冒険と探検
61 … 野外活動での危険
63 … 世界観を育てる「散歩」
63 … 子どもの、行動半径と世界観
65 … 遊びのアイテム
67 … 昼と夜 …… 視点を変えてみる!
68 … 野外体験活動保育計画 —— 花緑命水
69 … 年間／月間計画 | その都度の実行計画
71 … おわりに 「他者／自己」を、もう一度考える
1〕〈いのちに出会う〉は〈ともだちに出会う〉と同じ
2〕子どもをとりまく環境の、時間軸的考察

巻末

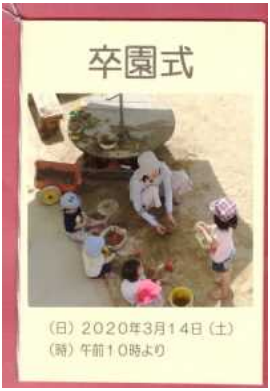
…… 涙の跡とレジリエンス〈立ち直る力〉
…… 自閉症スペクトラム障碍の子ども
…… 食と家庭の崩壊
…… 子供、子ども、子どもたち、等々の表記について
…… 体験活動 stage
…… 漢字（白川静）で考える子育て

この小冊子の活用に際して、紙面で表現できなかった箇所があることから、
webサイトを併用していただけることを望みます。
https://193pub.com/

ことの起こり

あなたは、なぜ保育士になろうと思ったか？

ここから問うのが「ことの起こり」にふさわしいだろう。大阪府高槻市のある保育園でこの問いをしたことがある。新人から古株までその場に20人ほどいた。「子どもが好きだから」が多くて当然のように思われるが「嫌いだったけれど保育士になってしまった」という声もあった。実習先の先生に誘われてなど、異口同音あったのだが、10年ほど前で楽しく懇談したこと以外よく憶えていない。笑いもあれば、涙をふく人もいた。けっこう盛り上がり、ワンパターンでなく、ロールプレイングゲームのようになった。古株の先生は、たまにはこういうのもいいなあとつぶやいていた。



さて、この冊子でのテーマは「いのちを子どもに（気づかせたい）」ということだ。保育という仕事は、乳幼児＝いのちそのものを預かる仕事だ。卒園式のとき、あかちゃんから５歳児まで見守ってきたことが思い出され、まさにいのちの成長を目の当たりにすることになる。ベテランであれば、こそ、一人として同じ子どもはいない。みんな違う。と、思うことだろう。類型的に感じることは確かに、ある。類型やタイプはあっても、子どもの育ち、環境はみんな違う。

私が「自然」というものにかかわり始めたとき、そのときの導きは「生きている証拠を見つけよう」だった。証拠とするからには五感が必要だった。同じ景色、同じフィールドであっても、繰り返しフィールドに足を運び、

生きもの（動物と限らない、植物も、生きとし生けるものすべて）と向き合うことで、表現できる・できないを問わず、そこで得たことは計り知れない。

◇

幼児に「いのち」をどう気づかせるか？　自分のいのち、他者（友達・親・きょうだい）のいのち、野外活動で出会うカエルやザリガニ、バッタ、ダンゴムシ、あるいは摘み取った花、紅葉した落ち葉や木の実などが「いのち」の対象だろうが、そもそも「いのち」に気づかせるとは、どういうことだろうか？

〈ともだち〉に対する〈おもいやり〉

幼児に限って**「いのち」を気づかせる方法は、**〈ともだち〉に対する〈おもいやり〉がキーワードでないかと私は思う。〈おもいやり〉が生まれる年齢は「心の理論」では４歳を待たねばならない。４歳未満では「いのち」を気づかせられないけれど、間主観性が成立する環境に留意することだろうと思う。

ところで、ひとつ懸念がある。

レジリエンス
立ち直る力

「レジリエンス」という言葉は、極めて過酷な例えば震災やトラウマから日本語として「立ち直る」のように使われる。それを中身にする子育ての本が出ている。立ち直りにくい子どもが増えているという。自己は、他者に習っていると思われることが多くあり、つまり「いのち」への気づきは、他者に対する〈おもいやり〉から培われることを念頭におけば、立ち直りにくいということは**〈おもいやる〉頻度がいちじるしく欠けている**という世相を背負っているのかもしれない。それは、私たちおとな乃至現代社会の課題ではないかと思う。

立ち直りにくいということは

（参考）

涙の跡とレジリエンス〈立ち直る力〉……巻末

友達（他者）の心を読む能力 ――「心の理論」

〈「心」の理論〉ではなく〈「心の理論」〉だ。〈「心の理論」の理論〉でも、ない。《心とは何か？》というやっかいな難問だが、人間と同じ心をチンパンジーも持っているのだろうかと研究者は実験を続けている。「他者の心を読む類人猿」と題したレポートが2017年、岩波書店発行『科学』1月号に掲載されている。「心の理論」について要領よく次のように解説されている。

> 他者の心を読む能力は、社会生活においてもっとも重要な能力のひとつである。他者が何を考えているか、どのような気持ちでいるのかを察することで、協調したり、無用の衝突を避けたり、逆に出し抜いたりできる。他者の心を読む能力を、心理学では「心の理論」と呼ぶ。他者の心についての「理論」を構築する能力、という意味である。

ジュリア・ポール・キーナンほか著『うぬぼれる脳』（NHKブックス 2006年）では次のように解説されている。

> 他人もまた自分と同じような考えをもっているということを理解できる能力

> 1歳では無理だが、1歳半から2歳児は、他人の心的状態にいくらか気づいている
>
> ―― J・W・アスティントン『子供はどのように心を発見するか』新曜社 1995年

1歳、2歳の幼い子どもは名前を呼べば振り向く。あかちゃんも名前を呼ばれると重い頭を持ち上げて這い這いしてくる。しかし、名前を”自己”として、あるいは鏡に映る向こうの”自己”や、好き好きしてくる”他者”の気持ちがわかるようになるには、かなりの時間（2～4年）かかるようだ。

7歳くらいまでに「他人にも自分と同じ心がある。しかし他人はそこに自分とは違う考え方をもっている」ということが理解できるようになる。これが「心の理論」である。

―― 福岡伸一『動的平衡』木楽舎 2009年

保育園の年長児は5～6歳だ。ということは、友達の気持ちや考えを推し量れない子がいる。クラス運営では、そういう子が少なからず含まれるということになる。

心の状態への意識的な気づきは、健常の4歳児に自己統制力が出現する必要条件になるとの興味ある可能性に注目しています。そして自分自身の心を理解するのは、自己統制力をいかに発揮するかへの洞察を深めるという、説得力ある示唆を行っています。

―― ウタ・フリス『新版　自閉症の謎を解き明かす』東京書籍 2009年

少々むずかしい表現だ。この書に限らず、友達の心に気づくようになるのは4歳からのようで、4歳未満つまり3歳以下では「ことごとく失敗する」という表現（実験結果）もある。クラス運営では、3歳児クラスで友達の心に気づく子どもが（まれに）現れるということになる。

「心の理論」の研究はどのように進んでいるのだろう。

発達心理学は、人の心の発生と成長を考える学問と言える。しかし、名実ともにそう言えるようになったのは、「心の理論」研究が登場した1980年代以降のことであるかもしれない。

―― 子安増生『心の理論』岩波書店 2000年

「1980年代以降」とあるから、とても新しい研究だ。どうりで学校で習っていないわけだ。では、これ以前、心はどのように研究者はとらえていたのだろう？

> 私の身体は私に、あなたの身体はあなたに、体感によって把握され、認識される
>
> —— メルロ＝ポンティ・コレクション 3
> 『幼児の対人関係』みすず書房 2001年

私が感じるように、あなたも感じているはずだ、と考えたようだ。現代の私たちは、相手を気遣って「しんどそう」と思ったり、映画を一緒にみて、細かいことは別にしても感動したところは同じかもしれないと思ったりする。古代から哲学者は話せばわかるというように考えていたようだ。

友達に迷惑をかけてしまった幼児に向かって諭す行為は、古代の哲学者と何ら変わらないのかもしれない。乳幼児がどのようにして心を獲得していくかはわからないままだったが、上に引用したように「発達心理学は、人の心の発生と成長を考える学問と言える」までになったのだ。

（参考）https://193pub.com/ で参照
①「心の理論」（THEORY OF MIND）に学ぶ
② では、”むかし”は、心をどう捉えていたか

1/3 「共感する」は生得的らしい

後述する「ミラーニューロン」が私たち肉体の一部として備わっているのであれば、「共感する」は意思によるのでなく生理的なことになる。あかちゃんは胎児のとき、母の声を感じていた。生まれてきて母に抱かれ、心臓音や母の声をからだで受けとめ安堵する――というストーリーでよいだろうか。つまり、あかちゃんも共感する能力をもっている。ミラーニューロンの存在に左右されるストーリーだが、生得的に共感する能力をあかちゃんがもっていることは確かなようだ。

2/3 間主観性（かんしゅかんせい）

あかちゃんと母は一体だ。この状態に「間主観性」という馴染みにくい用語が与えられている。母はおとなであり、自己が確立している。あかちゃんは自己が確立していない。あかちゃんは自身の心や体をどう感じているのだろうか。心としては「仮の自己」とでもという間主観性の状態にある。母から独立する前、心は母に支えられている。

他者の心を読む能力（「心の理論」）は４歳を待つことになる。それまでに、間主観性から独り立ちし、自己を表出できるようになる。間主観性として自己が守られる”期限”は３歳の誕生日を待つことになるらしい。おかあさんは、３歳になるまで我が子のお世話で大変だ。

入園年齢について３歳未満と定められている〈小規模保育園〉は、間主観性という心で満たされているといえるだろう。

3/3 ミラーニューロンの発見 1996年

ミラーは鏡。何かを映す鏡。ニューロンは脳にある神経細胞。鏡の役割をもつ神経細胞が脳のなかにあるという。イタリアの科学者が1996年に発見した。

レストランでメニューを見て注文した。注文を待つ間、隣のテーブルでは別の客が注文していた料理が運ばれてきた。(美味しそうだあ)(注文を変えたいが無理だなあ……)(魚と肉で迷ったけれど、肉にすればよかった……) これがミラーニューロンの作用だ。過去に味わった経験が食べる前に想像できる。食経験が豊富なら、目で見ただけで想像がふくらむ。

〈共感〉はミラーニューロンの仕業ということになる。新生児に間主観性が伴うのもミラーニューロンの仕業で、ミラーニューロンの発見者は「スーパーミラーニューロン」と名づけたりしている。ミラーニューロンの役割については未解明が多く、誕生前から備わっている理由は謎だ。進化のなかで受け継がれ続けているのだろうか。共感する能力は生得的なのだ。コミュニケーションに支障をきたす自閉症スペクトラムは、このミラーニューロンが関与する障碍ではないかと研究が続いている。

（参考）https://193pub.com/ で参照

① 自己と他者
② 間主観性って何？
③ ミラーニューロンの発見
④ 共感する、とは？

これらを理解し、自分のものとするには、なかなか苦労がいるだろう。しかし、現場で保育事例の多くを体験しているならば、そのことが最も近道にいることになる。ヴィゴツキーのいう最近接領域にいることになる。

乳児の保育環境といのち

ローレンツ
　ベビーシュマ

乳児（0,1,2歳）の保育環境といえば間主観性の理解が助けになる。もうひとつはベビーシュマだ。後者は、コンラート・ローレンツ（動物行動学者）がネーミングしたそうだ。生得的という教えは神秘的（霊性）であるし、これに救われる。

子どもの可能性を最大限に生かしたい —— 親であれば皆が望むところだろう。子育てを大事にしたいとき、肝腎なことは「子どもの主体性」の理解だ。

このように用語を並べたり「理解」が続くと、子育ては、むずかしい。だから、様々な子育て模様となる。

「いのち」をどう気づかせるか —— 野外活動の目的なのだが、あかちゃんに始まる子育てそのものが「いのち育て」だし、子ども自身が「いのち」に気づくということは、他者の発見ということだ。それは4歳の誕生日を待つことになる。

とはいえ、お産して、母親が我が子を抱くことは自然なことで誰もがすること。けっしてむずかしいことではない。

◇

野外活動・目的の一つ「五感」は生得的とされる。「五感」の大切さを言うことは容易だが、その実行や理解は思いの外むずかしい。その原因のひとつは第六感とも言われる「直観」を五感理解から切り離さないこと、そして、宗教心とは別に誰にも「霊性」が潜む。五感と直観と霊性は、様々な体験のなかで場面に区別なく現れる。できるだけ豊富な体験を通して理解を深めたい。そのことが「心」と、心と等号で結べる「いのち」（自己と他者の）を豊かにする。

〈五感を鍛える〉というフレーズは決まり文句のようにつかわれる。五感はゼロから出発するのでなく、生得的にすでに持ちあわせている。無から有を生じさせるのではない。だから、〈鍛える〉という誤った認識に立たないようにすることが肝要だ。

生きる源（みなもと）といってもよい五感を〈鍛える〉のではなく〈失わない〉こと。積み重ねるように五感を豊かにする、というのであれば〈鍛える〉も良かろう。

一例をあげよう。はだし保育だ。這い這いの頃は、床や地面に、足だけでなく手もあてることになる。手足の肌が直接それらにふれる場合と、靴下などにおおわれている場合とで、あかちゃんの感じとるものが違うだろうことは容易に推察される。〈失わない〉はこの実践ということになる。こうした基礎が、年長になって、野外活動の体験を豊かにする。

（参考）https://193pub.com/ で参照

① 母に抱かれて人間となる

ヤノマミ編

ノンバーバル編

新生児学入門編

②「五感」は生得的……五感と直観と霊性

他者の発見が、自己を確かにする

「他者／自己」という言葉、「友達／自分」でも同じ意味になる。前者のような堅い言葉をつかわなくてもよいが、心理学は19世紀起原の学問で、それ以前は哲学だった名残ともいえる。

砂場でおもちゃを取り合いするふたり。あっさりゆずる子もいれば砂を投げてしまう子もいる。「自己／自分」中心にみえる風景だ。もう少し年長になって、散歩のとき、並んで歩こうとする子がいると思えば、よそ見に夢中になってしまう子もいる。「他者／友達」を意識できる子・まだ意識できない子が混じる。

脳に損傷を受けることで脳の機能が明らかになることがある。失われているにもかかわらず、その腕を動かそうという意思が働く。健常であれば想像することすら困難だ。自分を自分とわかるのは脳の右半球とする実証が多くある。右半球の前部と側頭部を損傷すると、鏡に映る自分を他人と思ってしまう例がある。

視覚障碍者は点字本を左から右へ一気になぞる。点字の一つは６点で構成されているが、その一つ一つ、一字一字を読むのでなく、ピアノ鍵盤を左右に指を動かせば流れるような音がするように、点字本を読む。目視で読む能力を実現させる「脳の部分」が、視覚障碍者の場合、指の触覚を読む。このことは先天性の視覚障碍者に通用する話で中途失明者は点字を読むのに苦労するそうだ。

自分を自分と認識するのは右脳説が有力だが、まだ探究は続いている。右脳を主としながら、左脳の役割もあるのではないか、ということだ。０歳、１歳では鏡に映る自分を認識しない。このことは、自分を認識する脳の働きはまだ発達途上ということになる。そこで「間主観性」が登場する。この言葉は、哲学者メルロ＝ポンティ

（フランス 1908-1961）が発想したもので、彼は「間身体性」という言葉も発想している。心も体も、母と一心同体ということだろう。ベビーシュマが母の本能をくすぐり、間主観性（と間身体性）という大切な発達保障が担保される。成長して**３歳の誕生日頃、脳の局在箇所に自己認識する機能が備わる**ようになる。

「他者／自己」は、これより後れる。1980年代以降に「心の理論」という考え方が始まり、古代心理学者に別れを告げ、自己が思うことをどうして他者がわかるのか、一方その反対、他者の気持ちがなぜ自分にわかるのか、そうした研究が本格的に進んだ。結果、**他者の気持ちがわかるようになるのは４歳からで、３歳まではことごとく失敗するという。**「ことごとく」は曖昧な表現だが、画期は極めて鮮明のようだ。自己があって他者があるという積木を積むような思考でなく、他者の存在が自己を確かにする、ということだ。こうした「人間らしい」尊いことが４歳までの幼い心に生じる。

自己が思うことをどうして他者がわかるのか、

一方その反対、

他者の気持ちがなぜ自分にわかるのか

脳に損傷を受けることで脳の機能が破壊されるように、自己認識が脳によるものだということは、これに失敗することの恐ろしさを想起せざるを得ない。子どもの発達保障は、家庭の子育てという個人的なことでは役割が重すぎる。保育士にそれを求めても厳しいだろう。子育ては社会の責任である、という根拠になるだろう。福祉や教育が、幼い子どもの育ちに貢献するものであって欲しいと強く願う。

（左）〈脳と心〉を理解する好著
自閉症スペクトラム障碍の子ども……巻末

いつからおとな？
――で、遊びを考える

「遊びとは何か？」――これを問い始めると底なしの沼に足をとられる気がしてしまう。「遊び」は子どもだけでなく、おとなを対象にしても普通に使用する。幼児教育の現場では、遊びは、最も大切な意味をもつ。なぜ大切なのか？　すると、「遊びとは何か？」の問いにもどってしまう。したがって、ここで示すことは、遊びを考える一つのアイデアにすぎない。

〈遊び / ゲーム〉と〈子ども / おとな〉で、比較する¶

		遊び	ゲーム	要点
1	始め方	友達・場所・時間	ルールが必須	遊びは３つの要素で成立する
2	運用	遊び方は変更できる	ルールに拘束される	遊びにはルール支配がない
3	終り方	宣言して終わる	ルール通りに終わる	遊びの終わり方は、さまざま
		子ども	**おとな**	**要点**
4	成長	非合理	合理	つまずきの乗り越えかた
5	規範	道徳	法	自尊心を育てる
6	探究心	冒険	探検	あかちゃんは冒険家

ゲームはそれを行うルールを、参加する者全員が諒解していることを前提にして始められる。ルールを知らない者がいるときは、ルールの説明を受けるか、最初は見学してわかった時点で参加する方法がとられる。遊びの場合、ルールを「遊び方」とも言うが、遊び方を説明してから遊び始めることはほとんどない。

たとえば、じゃんけん。じゃんけんから始まる遊びは多いが、じゃんけんのしかたを説明している場面に出会

うことはほとんどない。2歳や3歳で、十分わかっていなくても、まねをしていつのまにか覚える。

かくれんぼをするにしても、じょうずな子と混じっておぼえる。「遊び方（＝ルール）」は遊びながらおぼえる。遊ぶ仲間＝友達、かくれんぼをする場所、そして、遊んでいられる時間が保障されたとき、遊びは成立する

ゲームで勝敗を競うとき、ルールは公平でなければならない。ルール破りのずるい人間が混じるとゲームは続かない。しかし、遊びの場合、鬼ごっこで幼い子どもは捕まえられても鬼にならなくてすむ。鬼が10を数えるあいだに逃げる場合、10を数える速さにきまりはない。速く数えすぎるとみんなから文句をいわれてやりなおすだけだ。

スポーツもルールによって行うが、スポーツが求めているのは「記録」だろう。記録は他者と比較して意味があるので、ルールは厳格に適用される。ゲームの勝敗について、スポーツのような記録が求められれば、ルールをしっかり守る必要がある。他方、勝負にこだわることがなければ「遊び」に近くなる。

勝負が決まったとき、ゲームは終了する。遊びも、隠れているみんなが捕まってしまったら終わりだ。しかし、長く遊んでいると、塾に行くからとか、暗くなったからとか、お母さんが呼びに来たとか、仲間が抜けて仲間が減り、誰かが「やめよう〜」と言い出して終わることもある。途中で喧嘩して、誰かが泣いて終わることもある。

◇

ここまでは、小学生を含む子どもの遊び集団を想定して描いてみた。しかし、保育所など5歳児を年長とする子どもの集団には、上記のような機能はない。保育士が「おとな」としてではなく、擬似的に小学生的な年長者

永田照夫（1976年）『光と水と土の保育』より

ぶりを演じることになる。幼児20人に対して年長者役の保育士が1人か2人という人数のアンバランスをどのようにカバーするかは、子どもの発達や遊びに対する理解が結果を出すことになるだろう。

保育士は、担当する子どもに何をさせるにしても、子ども自身の意思（主体性）でとりくみがなされるよう、子どもの心が熟す時間的配慮を行っている。遊びの「かたち」だけを真似るとき、遊びは「ゲーム」と化す。そうした危うさを内包するむずかしい課題であることを指摘しておこう。

「つまずき」でわける子どもとおとなの境¶

『光と水と土の保育』より

いつまで子どもで、いつからおとな？

中学生や高校生は子どもかおとなか。こんな問いかけは無意味だろうか。からだはすっかりおとなでも、年老いても、心のどこかに「子どもがいる」と思う人は少なくないだろう。子どもかおとなか、境界のような線引きは、無意味かもしれない。

それでも、厳然と、「こども／おとな」という言葉はつかわれる。実態としてもその存在は認められる。保育という職務で「子ども観」を問われるとき、同時に意識するのは、子どもが置かれている環境（社会的・自然的）であり、歴史的背景であり、子どもの将来＝おとなの世界であろう。

そこで、私は提案したい。子どもとおとなをどこで区切って見分けるかを――。それは「つまずき」。人間はその成長過程で必ず失敗する。他者に迷惑をかける。そ

うした「つまずき」を重ね、つまずくことで成長する

◇

人間は、いつから「つまずく」か。あかちゃんが、1歳児が、こぼしまくって食べる、その様子を失敗とみる人はいない。歩き始めた乳児がころんでも、それは、つまずきでない。2歳児が、ものをとりあい、泣かせたり、かみついたりする。よくないことであっても、相手の気持ちをどうやってわからせようかと保育士は悩む。保育士のつまずきかもしれないが、子どものつまずきではない。5歳児、友達と遊んでいて思うようにならず喧嘩になった。喧嘩をみていた子どもたちも考える、どうすればよいかと。つまり、就学前幼児のそれらは「つまずき」ではない。問題解決の方途を彼らに求められない。

「非合理」を受容する¶

では、「いつから」問題解決に立ち向かわせればよいか。その「いつから」に符号するときを「おとな」の起点と考えてみる。嫌なことは避けたい、こわいことはしたくない。そういう思いから合理的選択や判断を下すようになる。

おとなに向かう成長とは、**非合理から合理に向かう**ことではないか（不合理ではない）。おとなになっても「子ども心」を持つといわれる人は、おとなである証の合理的思考をしながらも、非合理な部分を併せ持つことではないか。おとなとしての合理を、非合理のなかで生きている子どもに押しつけてはならない――と、保育士の多くが自覚し悩み格闘する。非合理を受容することは、親子の関係でもいえるが、忍耐のいることである。忍耐を支えているのは、愛と理解であろう。

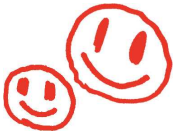
ここで一つの解が得られる。少なくとも就学前の幼児のあいだは、非合理を十分に経験させることが大切であ

り、それは即ち「遊び」の重要性を意味する。ルールに支配されるゲームは、合理の成果物であり、遊びとゲームは相反する。

決まりごと（法）ではなく自尊心（道徳）を¶

非合理と合理、遊びとゲームの違いを、「道徳」と「法」で考えてみよう。「法」は規則、決まりと読み替えられる。「してはいけません」あるいは「しつけ」の場面でつかわれる言葉が隣接する。「道徳」は決まりごとではなく自発的な行為に期待されるものだが、「してはいけません」や「しつけ」の場面でも道徳的な導きをうながすこともある。（参考図書、渡辺洋三『法というものの考え方』1959年）

合理的判断、価値観を幼児にわからせようとしても通じない。したがって、決まりごととしてしつけたり教えこもうとする。押しつけるのでなく気づかせる工夫をしたいと考え、時間的配慮を行い（待つということ）、自尊心を育てていくのがよいと考える保育士は多い。イソップ寓話にある「北風と太陽」のごとく。非合理を十分に経験させるには「遊び」が適しているように、自尊心を育て規範のもとになる道徳を身につけるに適しているのも「遊び」だ。将来のつまずきに備えて自尊心をしっかり育てておきたい。



あかちゃんは”冒険家”として生まれた¶

最後に、曖昧、適当につかわれている「冒険」と「探検」の違いを明らかにして、子どもの将来に夢と希望をもちたい。

新明解国語辞典第三版によると――

冒険…危険を承知・（不成功を覚悟の上）で行うこと。

探検（探険とも書く）…危険を冒して、未知の地域に踏み込み、実地に調べてみること。

「南極**観測**」は「南極**探検**」と表記することを嫌った政府による呼称であり、政府は危険を冒してはならないとした（本多勝一『冒険と日本人』）。しかし、人類未到の地だった南極大陸では、1911年、アムンセン（ノルウェー）が南極点に到達し、これはまさに冒険だった。大陸の発見、極地点への到達は、”大陸の探検”へ道を拓（ひら）いた。ジェンナーによる種痘の発見は地球上から天然痘を消滅させた。これを境に子どもは「死なない存在」となり、子どもの未来を考えるようになった。社会の関心事に「子ども」が加わった。冒険から→探検へと、人類の歴史に学ぶことは多い。

あかちゃんが生まれ出たその瞬間は、あかちゃんにとって”冒険”だった。冒険は多くの人びとに支えられて初めて成立する。それがなければ「死」が待っていることもある。そう、わたしたちは「冒険家」として生まれた。あかちゃんの冒険は、誕生を待ち望む愛で見守られ抱き上げられた。

冒険家として生まれたことは「無限の可能性」を意味する。そして、単刀直入にいえば、子育てとは無限だった可能性を摘み取っていくことだ。皮肉な言い方をして申し訳ないが、わたしたち（おとな）は子どもとかかわるなかで無限のままにしておけない。子どもの可能性を選択的にみてしまう。合理的選択は、非合理の世界にいる子どもをそのままにはしておけないのだ。

そこで「遊び」が登場する。幼少期にしっかり十分に遊ぶことが、冒険家から探検家へと道を拓（ひら）く。

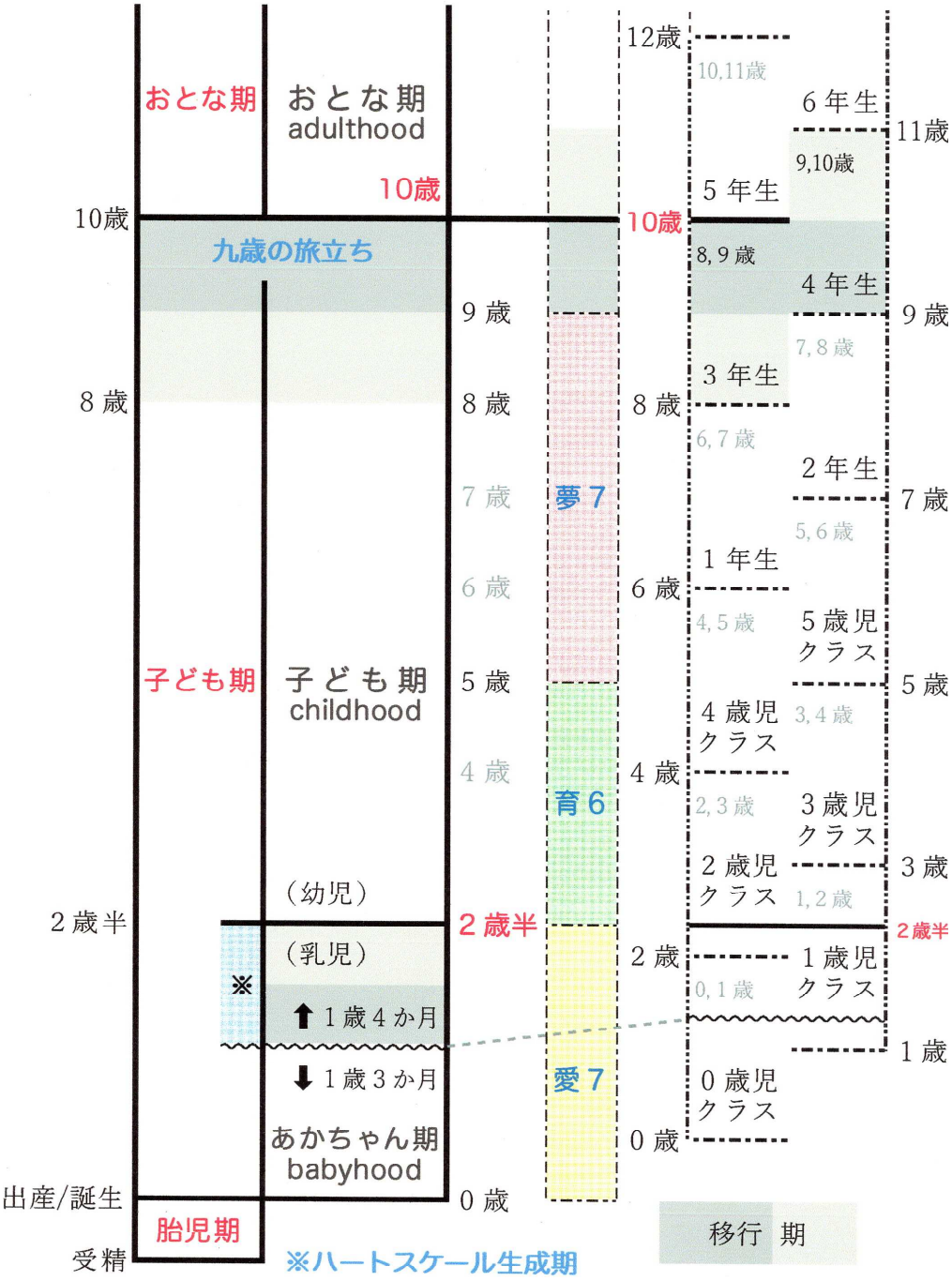
結論 … 子どもとおとなの境界は ……¶

　では、「つまずき」を体験させ、自分で問題解決にあたらせる、つまり「おとな」はいつからだろう。私は、10歳を超えてからで、小学5年生くらいを一つの目安に考えている。つまずきに耐えられる自尊心をそれまでに十分育てておく。たっぷり遊ばせておく。あくまでイメージ的な捉え方で、子どもとおとなの中間、移行期を年齢では8,9歳頃、学年では小学3,4年生を目安とする。「おとなになったばかりの子ども」または思春期・青年期は、必要に応じて、親たち「おとな」が手助けすればよい。それが「おとな」の役割と考える。自尊心を支えに主体性のある人間へ。このように考えることで「遊び」の必要性、重要性が伝わればと願っている。

（参考）「九歳の旅立ち」を命名する
https://193pub.com/ で参照

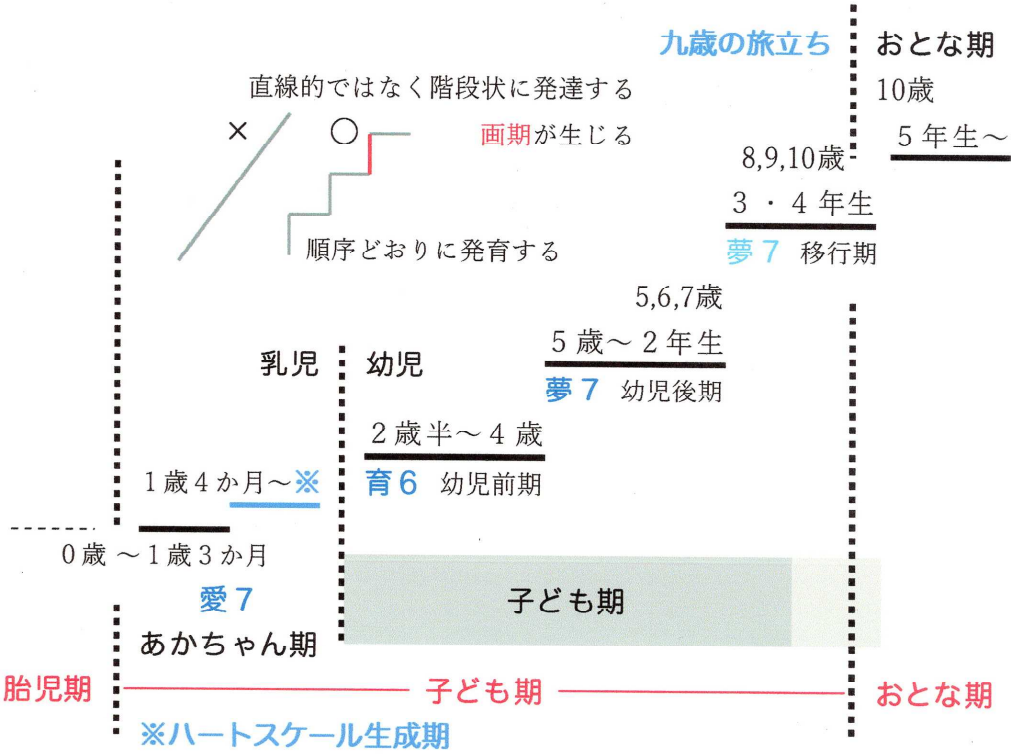
「子ども期／おとな期」対照図

提案: 山田利行 2018.11.2



年齢(学年)による発達段階

提案: 山田利行 2018.11.3



愛7|育6|夢7……「子ども期の再生」"The Renaissance of Childhood" Project

参考図書

フィリップ・アリエス
『〈子供〉の誕生』
みすず書房 1980年

ニール・ポストマン
『子どもはもういない』
新樹社 2001年

本田和子 ♠おすすめ
『子ども100年のエポック』
東京書籍 2000年

《 3つの体験 》& ハートスケール

我が子には、たくさんの体験をさせたいと思う。小学生も高学年であれば、どこかに出かけたり、教育施設の体験プログラムなどに参加させてみようかと思う。幼児では、親が連れ出して一緒に遊んでみようと思う。「体験」はさまざまな場面で多用されるが、本稿では、体験を《3つ》に定義して提案する。

》》3つの体験

① 感動する体験

② 繰り返す体験

③ 食べる体験

1: **感動する**体験 〉**内言。**初めの1回のみ。
自分ひとりでは実現しない。
2: **繰り返す**体験 〉**外言。**自分ひとりで可能。
3: **食べる**体験 〉生活体験 / すべての体験

言葉にならないから、感動する¶

映画をみて「よかったあ〜」と感動したとき、それ以上の言葉にならないものだ。一緒にみている仲間がいるとき、場内が明るくなると、言葉を交わすのが億劫になる。

読書感想文の課題では、感動したことを書けばよいかなと思ったりする。しかし、感動したときはやはり「よかったあ〜」と思うばかりで、書き言葉はなかなかでてこないものだ。

自身の体験を超えるから感動するわけだ。過去の体験を説明する言葉は出てくるが、初めての体験を言葉で説明するのは容易でない。だから、感動するのだ。つまり、**言葉にならないから感動する**ともいえる。

映画をみたあとの帰り道、本を読んでしばらく時間をおけば、心の整理ができてくると言葉が出てくるだろう。内にひそめた言葉＝「内言」が感動とともに発生し、やがて「外言」として、自身で捉えられるようになる。

◇

子どもの場合を考えてみよう。ぶらんこはいつから乗れるようになるのだろう。

早い子どもは、2歳で乗れるようになる。しかし、初めは自分で乗るのではない。乗せてもらうのだ。「乗る」が先で「降りる」が後だ。

初めて乗ったそのとき、子どもは感動するのだろうか。

乗りたいと思い、近くのおとなに頼み、乗せてもらう。うれしいという気持ちがわくかもしれないし、うれしい気持ちはなく、ぶらんこ座面の感触や揺れる感触をさぐるほうが先行するかもしれない。果たして「感動」という言葉対応はふさわしいのだろうか。

あかちゃんがお母さんのおなかから出たその瞬間、あかちゃん自身にとって「感動」だろうか。「体験」といえるのだろうか。感動や体験といえるものはいつから始まるのだろう。ぶらんこに初めて乗ったそのときを「体験」としてよいと思うし、感動またはそれに類するものが生じるのではと思う。

繰り返す体験の始まり¶

一度でも「乗せてもらう」と、それからはぶらんこを目にしたとき、再び乗りたいとせがむようになる。これは、〈繰り返す体験〉を意味する。つまり、繰り返す前の初回があるわけだ。したがって、2歳児の感動とはどういうものかはわからないが、〈感動する体験〉をしていることになる。

幼児を含めて子どもを海辺に連れて行くと、渚に近づく。渚まで近づいて、ゆるされれば、足をつけたり、水

をさわる。やがて「冷たい！」などの声が聞こえてくる。よく観察してほしい。足をつけたその瞬間、おとなでも同様だが、冷たいと発声するより前、言葉にならない感触を感じるはずだ。そのあとに、既知の言葉「冷たい！」が出てくる。冷たいが適切でないと思えば「気持ちいい」と言ったり、人それぞれになるだろう。つまり、初回は、言葉にならない。**内言が発生し、外言を生じさせる。**波が寄せては引く繰り返しを行うので、自身が動かずとも〈繰り返す体験〉がその場で起きる。〈繰り返す体験〉を経験すると新たな”ふれあい”を求めて前進することになる。

（参考）https://193pub.com/ で参照
海を子どもたちの遊び場に

ここで新たな提案をする。

人は《「感動」という名のものさし》を持っている。ものさしだから計ることができる。そのものさしは人によって皆違う。

ものさしというからには、ものさしのかたちをイメージしてかまわないが、「かたち」はない。想像上のものさしだ。計る道具にたとえているが目盛りはない。何を計るのか？　**「気持ち」を計るものさしだ。**

人は、育ってきた環境、さまざまな体験・学習をとおして感性や価値観を持つようになる。好きなこと、得意なことは前向きに取り組もうとする。その前向きになれるものさしを持っていると考える。**ものさしを「ハートスケール」と名づけてみた。**

ぶらんこに乗りたい、と思うものさし¶

初めのうち、小さく細いものさし。何回も乗っているうち〈繰り返す体験〉によって太く丈夫になる。

大きくゆすられると、「こわい、やめて」と言ったりする。乗り続けて、ものさしをさらに太くして丈夫にする。丈夫なものさしを自覚するようになると、ぶらんこを大きくゆすってほしくなる。すると、ものさしはこうなる。太い部分は丈夫になった部分で、両端は経験がまだ浅いので細いというイメージ。

ぶらんこに乗るたび、さらに丈夫になる。〈繰り返す体験〉の意味がここにある。ハートスケールの原型ともいうべきイメージになる。

⇨

ぶらんこを降りる¶

ところで、ぶらんこから離れたい、自分で降りたいと思うようになる。だっこではなく、自分で降りたい。「おりる」と自己主張するようになる。ぶらんこを、ひとりで降りるときがいつか必ず来る。幼い子どもの心に、やってみようという気持ちが芽生えてくる。〈繰り返す体験〉でハートスケールが成長し、つまり、**内言が充実してきて外言が生じ**「降りる」と言い、降りる動作に結びつく。そして、初めてひとりで降りられたとき〈感動する体験〉となる。

こうした行動に出会うと、ぶらんこに乗ったばかりの幼児は、すぐに降りようとする。こんどは降りる体験を繰り返す。ハートスケールが、イメージではあるが、成長していく。

渚で足をぬらし、さらに前進するのも同じ理由による。

再び、感動する体験¶

左図で緑色は〈繰り返す体験〉で出来るものさしだ。ぶらんこを何回も繰り返し乗ることで出来るものさしだ。赤色は自分ひとりで降りることを意味する。

内言が充実し臨界に達すると、赤い部分はまだ本人には見えないが、本人の意思と行為で赤い部分に達することを予言している。結果、到達した瞬間、〈感動する体験〉となる。

イメージだが、ハートスケールから赤色に伸びてゆく細いものさし。赤色に達したその瞬間（＝感動）赤い部分は消える。ものさしに取り込まれる。細いものさしは、〈繰り返す体験〉で太くなり、確かなものさしに成長する。

ヴィゴツキーの理論「発達の最近接領域」¶

Zone of Proximal Development

ヴィゴツキー
1896-1934
ベラルーシ出身
旧ソ連の心理学者

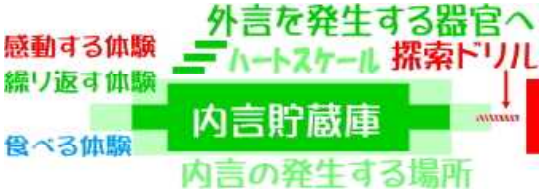
ぶらんこから自分ひとりで降りられるようになるには、腰を少しすべらせるなどして足が地面にとどけばよい。背景では、心の準備がともないつつある。ヴィゴツキーは次のようにいう。

内面的発達過程を子どもに生ぜしめ、
呼び起こし、運動させる

先程までは出来そうになかったことが、機が熟すとい

うか、ふと出来る気がして、試そう、やってみる！
——これが「発達の最近接領域」理論。

NG例：内面（内言）が充実することで、誰にも〈感動する体験〉は実現する。保育園等で、多くが出来（到達し）、出来ない子が一人とする。皆で励まして出来るようにすることはNGだ。〈感動する体験〉を実現するには、日を改めるなどして「待つ」ことが肝要だ。目的の行為が大事なのでなく「発達の最近接領域」への到達実現こそが大事なのだ。このことが発達保障になる。要は、子ども一人一人、自力で達成したと思わせる設定が必要だ。

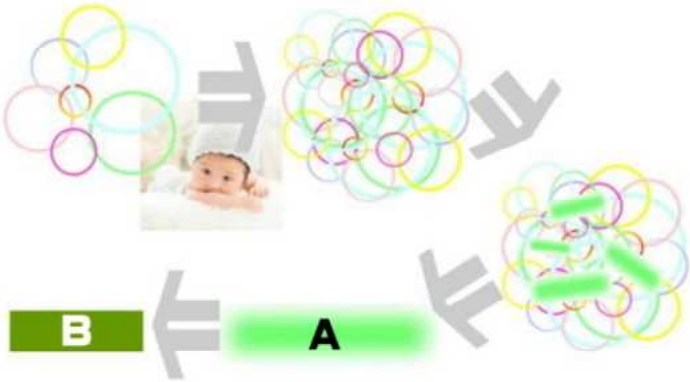


赤い部分で「感動」が発生する。
ドリルの先が「発達の最近接領域」

生まれたばかりのあかちゃんは「ものさし」を持つか？

生まれ出たそのとき、あかちゃん自ら感動するか？　感動するには内言が生じそれの充実が必要なので否定される。そこで、左図のイメージ「あわつぶ」を描いてみた。

俗な表現になるが「あわつぶ」は見守る親たちの「愛」の成果物としてもよい。



（参考）
あかちゃんの心
……11p

「あわつぶ」が集まって「ハートスケール」の原型となる。心細いイメージで恐縮だが、「愛」が集まって「ハートスケール」が出来るといえば親たちの実感を伴うのではないか。Aは1歳3か月頃と想定している。もちろん個人差はあると思われるが、定かでない。

「三本ストロー法」……1歳3か月頃の意味¶

ストローを3本用意する。3本のうち1本めをあかちゃんの目前に差し出す。誰かに抱かれていてもよいし、自立して歩行できるときはその姿勢でかまわない。

10か月のあかちゃんの場合、「はい、どうぞ！」と目前に差し出されても、声を発するおとなを注視するだけでストローに関心を示さない。1歳2か月の場合、ストローをつかみにくる。

10か月、1歳2か月は喩えであって、それは前後する。めまぐるしい発達をこの時期にみせる。声を発する人に関心を示したあかちゃんが、わずか4か月後に人ではなく物（ストロー）に関心を示すことができる。不思議だけど「はい、どうぞ！」とストローを差し出すと、なぜ

か例外なくストローをつくみにくる。這うしかなかった子が、あるときつかまって立ち上がり、そして、誰の助けも借りずに歩き始める。ストローへの関心移行はこの経過と関係があるのだろうか。

さて、2本めを同様に差し出す。1本めをつかんだまま、2本めは空いている手で2本めをつかみにくる。

そして、3本めを同様に差し出す。両方の手はストローでふさがっている。あかちゃん、どうするか！　どちらかの手を開放するのでストローは重力にしたがって落下する、と同時に、空いた手で3本めをつかみにくる。これが1歳2か月だ。

画期は、1歳3か月（目安）にある。¶

ところが、1歳3か月は違う。落下をみない。持っているストロー2本を持ったまま3本めをとりにくるのだ。所有欲といってよいだろうか。1歳3か月も喩えだ。前後する。画期が存在するということだ。

※その3本めを、右・左、どちらの手でつかもうとするだろうか。
（きき手は、さらに後年で定まるとされる）

◇

考えるものさしが乳児に存在すると仮定した。これが、上図（左ページ）のAに相当する。

ぶらんこに乗りたいと思うのは、もっとずっと後のことだ。ということは、乗りたいと思う気持ち（志向）がわくこともそうだが、そのときはものさし（ハートスケール）があり、そのものさしが乗りたい志向を生むことになる。内言が外言を生む過程が推測される。

体験のサイクル¶

繰り返す体験（体験2）が感動する体験（体験1）を生む。体験（1）が体験（2）を促す。そして、再び体験〈感動する体験〉を生む。乳幼児期のあいだ、無数にこのサイクルが営まれ、一人一人異なり同じものがないハートスケールが存在することになる。

長じておとなになって、子ども期によく遊び多くの体験をすることで、体験（2）の先にはいつか体験（1）が現れると信じるあるいは確信となり、先のことはわからない・見えなくても、今取り組んでいることを励むようになる。または、目標を立てることが出来る。

第3の体験「食べる体験」¶

生まれたその瞬間から「体験」が始まる。親が子育てに愛を注いでいることに対して、あかちゃんが体験するであろうことにも意味があろう。

母乳で育てるか、人工ミルクか。離乳して、さまざまに食べる。いろいろな食べものを経験することは「体験」だろう。布オムツか紙オムツか、この選択もある。添い寝か、ベビーベッドか。選択肢はどんどん増える。こうして、懸命に育て・育てられる。

これらは「体験」といえる。これを「体験3」とし、包含関係は上図のとおりだ。「体験3」のネーミングを「食べる体験」とした。「食べる」だけの体験ではなく、先の事例、布オムツか・添い寝かとあるように、それらを総称してあるいは象徴的に「食べる体験」とした。

いつもいつも感動するわけではない。もとより誕生ま

大切な
空気のような体験

もない頃は「あわつぶ」でイメージされ、第3の体験を想定する必要があると考えた。食べることはいのちをつなぐこと。欠かすことができない。空気のような存在・体験だが、極めて重要だ。

「食べる体験」と「食べる」ことの意味¶

2歳、3歳児のすっかりはえそろった歯は美しい。ちいさいからだ、ちいさな手、しかし、大きな口をあけて見せてくれる歯は、からだに似合わない力強さを感じさせてくれる。豆まきで、煎った大豆を口に入れ、ゴリゴリと音を立てる。口に入りきらないリンゴをかじる。さかなだって、平気だ。どこが食べられるかな、見分ける目と手の愛らしいこと。

体験とは、特別なことだけではない。おなかがすいて食欲がわく。空腹を満たす意慾が生きるエネルギーとなり快感をもたらす。一緒に食べる仲間・友達・家族と共有する時間が生活の基礎となり、食べものを供給し、調理する人たちをも結ぶ。

子どもたちに「体験」させたい、と思うおとなにありがちな間違いを指摘しておこう。2、3歳の頃はほぼ例外なく、5歳児であっても、その頃の体験は彼らにとって「はじめて」のことだ。おとなが用意したサプライズは、幼児には特別なことでなく「ふつう」なのだ。「楽しかった？　びっくりした？」と訊ねれば、「楽しかった、びっくりした」と応えるだろう。「おもしろかった？」と訊ねれば「おもしろかった」と応えるだろう。それらは鸚鵡（おうむ）返しではなく応答の練習成果であって、発せられる言葉（字義）通りでないことを承知しておいてほしい。

「食べる体験」は毎日、空気を吸うように散らばっている体験だ。見守られて安心して得心のゆく時間がすぎさってゆく。あかちゃんが泣く。おなかがすいているのかなと乳をあたえて、すやすや眠る。その泣き声は、あかちゃんの言葉であったことを発見して母もやすらぎをおぼえる。その延長線にとぎれることなく「食べる」ことの意味がある。

「体験」とは特別なことだけではない。「ふつう」を十分に満喫し、あるとき「特別な」体験にめぐりあったとき、子どもは小躍りして喜ぶ。「もう一回して……」とねだる。安定して、過不足なく生きていられる日常こそが大切なのだ。わたしたちおとなは、ちからを抜いて、せめて子どもの前では笑顔で向き合いたいと思う。

昔話の効能を語るなかで、小澤俊夫は……

『こんにちは、昔話です』(p42) から。

――いつものお母さんの声で、いつものお父さんの声で、いつも慣れてる本を読んでもらって、安心して寝るということは必ずあります

これは、「体験３」に相当する。

――「未知への好奇心」は、魂をかりたてるものです

これは「初めての１回だけ」の「体験１」に相当する。

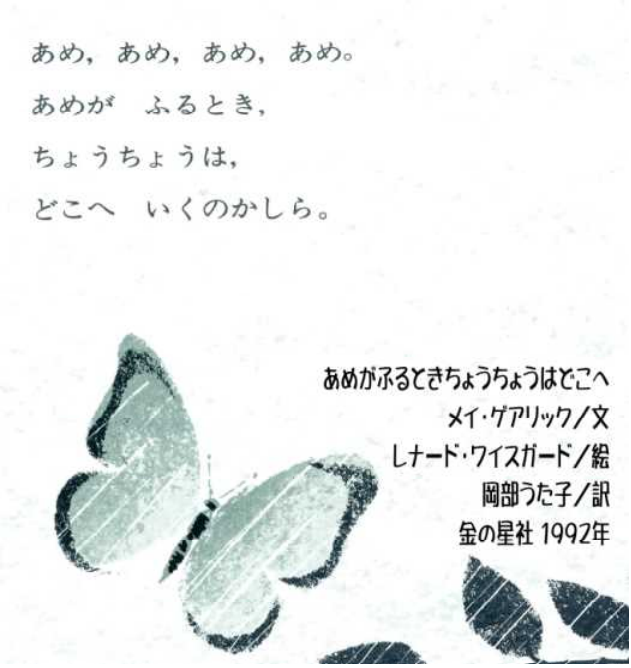
――「もう知っているものと再会する喜び」は魂を静めてくれます。子どもはその両方を求めているのではないでしょうか。

これは、「繰り返す」体験２に相当する。

「その両方」は「未知への好奇心」のこと。

子どもが
今日
共同のなかで なし得ることは
明日には
自分ひとりで なし得る

レフ・ヴィゴツキー
1896 - 1934



野外体験活動保育の実際とその評価

乳幼児▶「体験」＋「活動」＝「学習」◀学齢児

―― と、考えてよいだろう。活動は体験とセットで意味を為す。ここを確認すると、では、何を・どう実践（体験）していくのかということになる。私は「野外」における活動をメインにしてきたから「野外体験」と冠しているが、野外は必須ではなく一つの模範にすぎない。

川和保育園（横浜市）。この写真は野外ではなく「園庭」で撮影されている。全国私立保育園連盟が発行する「保育通信」2015年1月号の表紙に掲載され、私は仰天し羨ましく思った。撮影、宮原洋一とある。クレジットでは ―― 冬の日は、みんなでたき火を囲んで　おしゃべりしたり、おやつを食べたり…―― とある。

ところで、体験活動に何を求めればよいのだろうか。よりどころの一つになるのは、レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー The Sense of Wonder』だ

レイチェル・カーソン
『センス・オブ・ワンダー The Sense of Wonder』
新潮社版p24 / 佑学社版p23 / 原書p56

I sincerely believe that for the child,
and for the parent seeking to guide him,
it is not half so important to know as to feel.

わたしは、子どもにとっても、どのように子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。

（参考）https://193pub.com/ で参照
① ルンバは10か月男児のお友達（動画）
② 土を集める子どもたち（動画）

目線の高さで飛び降りる5歳児

アフォーダンス

Ｊ・ギブソン（アメリカ 1904-1979）は、アフォーダンス affordance という概念を考案した。喩えとして適切でないかもしれないが —— 飛行機、これが編隊を組むとき、並行して飛行するとき機体同士の距離・高度差は訓練で身につけるという。視覚では、地上のように測る基準がないからだ。

一方、幼児が道を歩いているとき、彼らは段差を見つけると、そこへ踏み込む。「危ないからやめてよ」と、おとなの声が聞こえてきそうだ。地表面を基準に、乳児は段差を感じとる。アフォーダンス理論がここに表れている。Ｊ・ギブソンは知覚心理学を創設した。幼児が段差になぜ導かれるか？は、アフォーダンスで説明できそうだ。子どもの発達理解のために、アフォーダンス理論をもっと取り入れては、と提案したい。

子どもは好んで飛び降りる。子どもは飛び降りるものだと思っているおとなは多いと思う。「飛んでみろ！」と挑発するおとなもいるぐらいだ。

どうやら、目の高さ？¶

飛び降りたいけれど、飛べるかどうか？　飛べそうな方向を真剣に目線で追っている。つぶさに観察していると、〈目線の高さ〉ではないかと気づいた。少しずつ傾斜がある段差では、高いほうへ歩を進めるうちに、（これ以上は無理）と見切りをつけた場所から飛び降りる。高いところで〈目線の高さ〉に近く、身長ほどではない。

それで実験を試みた¶

5歳児の目線の高さは概ね100cmだ（身長は約110cm）

「巧技台」（こうぎだい）は多くの幼児施設に備えられていて、10cmごとに積み上げられる。これを使用して、5歳児クラスの子どもに飛び降りてもらった。

70センチであれば、全員（18人）らくらく飛び降りられる。膝を折り曲げる屈伸運動をしないで、ほぼ立位のままで飛び越えられる。しかし、90センチの高さに上げるとそうはいかない。「こわい」とつぶやく子どもが出てくる。膝を折り、着地に備えるようになる。それでも、巧技台を通過するスピードは速く、誰もが飛び越えていく。

100cmに上げた。「こわい」の声は、ほぼ全員から聞こえる。１段10cmあげるだけで一変する。そして、子どもは、なんとか飛ぶ。

さらに1段上げて、110cmに上げると、「こわい」の声に体の堅さが伴ってくる。つまり、限界を超えている。

この実験・検査は、運動能力を測るとか、鍛えること

にない。普段の生活で、あるいは野外活動で、どうして高いところに登りそして飛び降りたくなるのか、その”生活”のひみつをさぐることにある。

1mの高さがこわくて、この高さに及ばない5歳児もいた。がんばってみようとやや無理した子どももいたかもしれない。

結果を得て……¶

80cmの高さを用意してもよいだろう。80、90、100cmの3つの高さを用意し、飛びたいあるいは挑戦したい高さを「繰り返し」飛び降りることで、体幹を鍛えるという考え方もできるかもしれない。

4歳児以下では¶

3歳でも、4歳でも、70cmは飛べるようだ。5歳児の上記実験でも、70cmを繰り返し飛んでいる子もいた。

この検証で考えたこと

(1) 5歳児に限れば、”生活”の体幹としては、
飛び降りられる高さに臨界値が存在する
(2) 5歳（児）未満での臨界値は不明
(3)「着地部分の検証」という課題がある

飛び降りようとしているときの「こわい」という表現

(1) 恐怖に感じ、飛び降りたくない、
あるいは、飛び降りられない
(2)「こわい」と言葉を発するものの、同時に、
どうすれば飛び降りられるか思考が働く
(3) 上記（2）は、4歳では生じず、
5歳になって生ずるという仮説を立ててみたい

なぜ、「目線の高さ」になるのだろう？¶

子どもは測ってから飛び降りる動作をするのでなく、〈勘〉で飛んでいる。なんども飛ぶうちに身につけた体幹だろうが、その結果が〈目の高さ〉になっているように思える。偶然なのか、何か意味があるのか、わからない。

指導で気をつけたいこと¶

この実験・検査は、運動能力を高めるために行うのではない。その目的では、幼児体育に詳しい知見を参考にして欲しい。110cmが飛べると、120cmに挑戦したくなる（子どもが？　保育者が？　の、見極めもむずかしい）。大半の幼児が飛べる高さを限界としよう。なぜなら、飛んで遊ぶことが楽しいから――。

階段道（かいだんみち）

―― 幼児は、なぜ山登りが平気なのか？――

「階段道」という言葉は一般的ではないだろう。住宅の階段があるところは階段室だ。社寺は100段を超える階段が多くあり話題になったりする。

そして、ハイキング道として整備されているところにも人の手によって作られた階段がある。それを「階段道」としてみた。

汗を拭き拭き、息を整えながら山道を歩いていて、階段道に出会う。短いとホッとするが長いとどこまで続くのか？と思ってしまう。高度を稼げて景色がよくなる利点はあるけれど、階段道のために山登りを敬遠することにもなる。

ところで、階段道の段差は〈おとなサイズ〉だ。幼児の身長と比較して、おとなの身長は1.5倍を超える。ということは、階段のおとなサイズ段差は、幼児には1.5倍のストレスになる。実際、手をついて上がるときもある。肥満気味の幼児には忍耐を必要とすることにもなる。

にもかかわらず、100段超えの階段道であっても、幼児の場合、通り過ぎれば体力も気力も回復が早い。なぜだろう？

階段の段差 ¶

戸建て住宅や集合住宅の階段は16cmが一般的だ。私が住む集合住宅の場合、4階まででちょうど50段。16cm×50=8m（住戸としては3戸分の高さ）。保育園の階段は段差約16cm。幼児対応でなく住宅と同じ。治水ダムにある階段は300段を超えるが段差約16cm。公園の遊具は自然石を加工していて均されているが20cmぎりぎりもあった。階段の段差は20cmを超えないように設計されているらしい。

（左）おだやかで階段のない山道
（中）歳月を経た階段道
（右）整備されたハイキング道

美しいまち並み。こうした高層住宅で階段を利用しようとする人は少ないだろう。100段で到達する階はどのくらいになるのだろうか。山道なら、仕方ないというより当たり前、選んだ道だし、体力は消耗するが達成感が伴う。幼児も達成感を感じているようだ。

前方▲、薄く見える山を経て、子どもらは今ここに到達している。

（上）急な上り坂　2017年　六甲山系

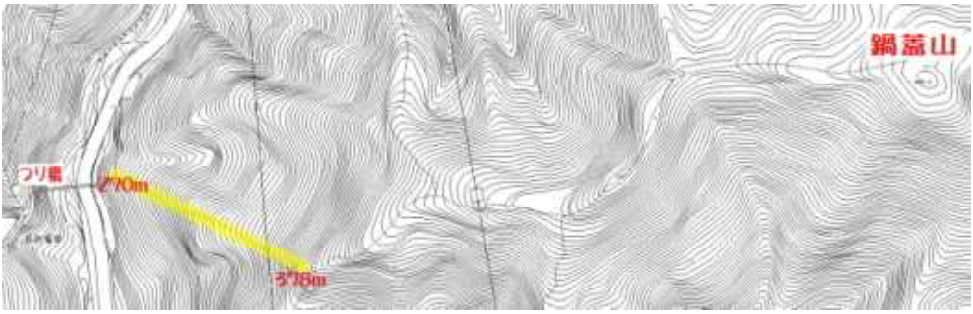
（上）　がけをくだる
2018年　六甲山系

幼児 登山の実際¶

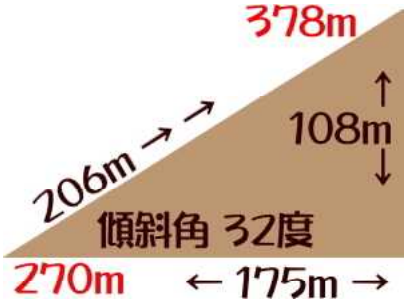
神戸のハイカーに知名度の高い六甲山縦走路。西方、菊水山（459m）から有馬街道を越える吊り橋（270m）まで下り、鍋蓋山（486m）に向けて再び急坂を登る。健脚のおとなでも難所の山道を5歳児クラスの子どもたちが笑顔をみせて登る。

すれ違う老夫婦の会話。保育園の子らと知って「孫もこんなことできるんやろか……」。この写真は12:48撮影。子どもがつぶやく。「おなかすいたあ～」

5歳児になれば誰でもこんな山歩きが出来る、というのではない。0歳児から裸足保育を実践し、園庭の水たまりに乳児がいることもある。散歩→野外活動へと進み、鍋蓋山への登山がゴールとなっている。到達可能な活動が示されている。



では、なぜこのような厳しいとも思える山歩きが幼児に可能なのか？¶



それは、まだわからない。ある整骨師にこの問いかけをしてみたところ「インナーマッスルのせいではないですかねぇ」と返答された。そのとき、私は初めて耳にした用語だったが、今ではこんなふうに考えている。

乳児が、寝返りしたり、這い這いしたり、立ち上がったり、これらはインナーマッスルのせいだろうか。筋肉もりもりの幼児はいない。インナーマッスルが登山を可能にしているのだろうか？

◇ ◇ ◇

坂本遼『きょうも生きて　第一部 』
偕成社文庫 1977年
p319～344

敗戦まもない頃の話。

小学校の先生は戦争で負傷し、足が不自由で義足だった。2年生のお別れに、みんなで学校の裏山に登ろう！ということになった。

参加は自由だったけれど……

―― 家の人にそうだんして、いける人だけがいくことにしたのだが、しらべてみたら、みんながいくことになってしまった。――

2年生が終わって3年生に進級するという春休みに……。さて、裏山に登っての下り道、先生が転んだ。子どもたちが先生をかついだ。

―― 小久保先生は、担架の上で、ないている。両手のこぶしで、かわるがわる目のところをふいている。五十五人の子どもたちのあたたかい心が、たまらなかったのだ。――

当時の子どもは、
これほどにやさしく、体力があったのだ。

いのち の かたち for child

いのちは、
子どもの手に　にぎられ、
つかまれている。

子どもの手をひくとき、
愛らしい気持ちになるのは、
いのちをつかむ……から、か？

こころは、どこにある？

子どもに〈いのち〉をどのようにして伝えたらよいか？　自然をフィールドとして活動を始めた20代のそのころから課題だった。「生きている証拠をみつけよう」をテーマに自然を観察するのが当時の目的だった。そして、今は幼児を対象に、野外活動で今も考え続けている。

子どもとは、2歳半から9歳で、すでに、子ども自身が手に「いのち」をつかんでいるのではないかと気づかされた。

その手には、石ころ、花、木の実、ざりがに、ばった、棒切れが……。

◇

いのちと「まるい」は関係があるのだろうか。卵はまるい。あかちゃんはやわらかくまるみがあってかわいい。人間のあかちゃんやほかの動物のあかちゃんもふわふわまるい。おたまじゃくしもまるい。ドングリもまるい。ハスの実はひしがただけど、まるい感じはある（鋭く針状になっていて痛いけれど……）。棒切れ、細長いけれど、子どもが好んで手にする持ち手はまるい。おはじきもお

手玉も、そしてコマまわしのコマもまるいなあ。砂浜でひろう貝がらもまるい。砂は、さらさらで気持ちいい。

すべり台の好きな2歳の男児が、そのすべり台の上から下を見下ろして「ドキドキする」と言った。その表現に幼児のこころを発見した思いだったが、ドキドキ＝心臓＝こころの等式が成り立つ。しかし、こころは心臓にあるのでなく、脳機能の作用だ。

芥川龍之介の作品『手巾（ハンケチ）』に「婦人は、顔でこそ笑つてゐたが、実はさつきから、全身で泣いてゐたのである。」とあり、それは手に握りしめられていた〈ハンケチ〉が感情を表していた、という話だ。

こころと心臓は等号で結べないとしても、こころはどこにあるのか？不思議だ。

そして思うに、子どもは、いのちを自身の手でつかむ、というふうに考えれば、犬や猫を「かわいい」と撫でるときも、人間のあかちゃんに向き合って手を添え「かわいい」と思わず言ってしまっているその様子からも、ここでは、いのちとこころは等号で結ばれているように思えてならない。

さらに調子に乗って言えば、子どもに限った場合、手でさわり、ふれあい、にぎったりすることで、こころを受け取り、いのちを感じ、いのちを大切にしようと思うこころが育ち、自尊心の基礎を築き高めることになると思う。

背中の君　棒切れ片手に　十三夜

この写真（左）は、「背中の君」の母が撮った。夕暮れまで遊んで、お月様が出てきた。背中の君もお月さんを見ている。月と我が子がアングルにおさまった。

「棒切れ片手に」と情景を描いたが、棒切れと「いのち」、このときは結びつけていなかった。背中の君は、日が暮れるまで十分に遊びきった。つかんでいたい棒切れとどこかで出会い、拾っていた。好きなもの、欲しいものを手にしていると落ち着く。長さもちょうど良かったのかもしれない。背中の君の目線は、お月さんに向けられている。お月さんも、背中の君を見ている。そして、棒切れと背中の君は、ひとつになっていて、そのラインもまた美しい。

民間の認可園を訪ねると、「訪ねたくなる保育園」という条件をつけてしまうが、一つとして同じものがなく個性的だ。園庭が広い上に、背後の山も園の所有で面積はヘクタール単位であったりする。公立の園（保育所）は画一的な印象をぬぐえないが、規模は千差万別だ。幼稚園はもちろん、認定こども園も規模は大きく園庭も広い。出入り口は同じでないが、老人福祉施設を併設しているところも少なくない。

でも、以上は、おとなの眼。あかちゃんは、ほふく室で一日の大半をすごす。５歳児は広い園庭を走りまわっているわけでない。お気に入りの場所がある。入ったことのない部屋もある。裏山では一度も足を踏み入れたことがないと思ってしまうところもあるだろう。

広ければよいというものではない。最も大切なことは、自分が所属する保育室のデザイン（飾り付けという意味ではない。子どもを誘導する動線、什器備品類、「コーナー遊び」をする場所など）と、園庭に心わくわくする場所があるか ―― ということだろう。

都会と田舎ではどうか。保育の始まりは、明治期においては都会の貧困と農繁期の水難事故だ。保育が福祉事業たる所以だ。幼児教育の始まりは、保育の始まりと一線を画されている。それを指摘するだけにして、しかし、認定こども園という制度が2015年に始まり（それ以前より、名称だけはスタートしていた）、子どもの発達を保障しようという社会保障制度により子どもの幸せを願う社会に進んでいると私は信じたい。

少し脱線気味だ。戻す。保育室は空調がゆきとどき、サッシ枠の窓で囲まれている。昔の縁側では、蚊にさされないよう蝿がとまらないよう婆さんがうちわで昼寝する孫を扇いだ。のどかな風景だ。これを保育業務に望もうとは思わない。でも、大気（空気）を感じながらスヤスヤ眠れることは、極めて大切ではないだろうか。「いのちに出会う」ということは自らのこうした体験を通して修得するものではないだろうか。証明できないが……。

はだし保育の実際をご存じだろうか。寒冷地と温暖な地域とで一概に言えないが、子どもは「はだし（裸足）」が平気だ。夏に裸足でいられる子ども（幼児）は、冬でも裸足で平気だ。夏の園庭には水たまりがある。裸足のあかちゃんはそこを這う。そして坐る。お尻は水たまり。坐れば泥をつかむ。つかめば口にもっていく。私はこういう場面に出会うと、あかちゃんの３年先、４年先、５年先、たまらなく希望が見えてくる。

いきものを飼う・育てる

いきものを飼う・育てるは、むずかしい。いのちを守るだけでなく、なんのために飼う・育てるかを問うことも、曖昧にしてしまいやすい。

幼児に、
観察はできない

「(継続)観察」という言葉がある。幼児(小学2年生まで)は、「(継続)観察」は出来ないと私は考えている。「観察する」ということは、継続を前提にしている。観察した結果は事後以降に生かすということだろう。こうした課題による学習を幼児(小学2年生まで)に負わせるのは能力を超えていると思う。

サツマイモを例にしよう。イモ苗を植えて、その”観察”を絵に描いて、あるいは造形工作して記録することはよく行われる。これは良しとしよう。そして、収穫。途中の草取りやお世話もあるだろう。それらの、一日の記録を何かで残すことは必要と積極的に良しとしよう。記録があるから(記録にとっておかなくても)苗植えの記憶を収穫に結びつけることは幼児に可能だ。しかし、その収穫や記録を評価し、”次は”こうしようということにならない。野外活動で最も大切にしなくてはならないことは、参加した子ども皆にとって楽しいイベントにすることだ。そのことが、今後の〈やる気〉の基礎となる。収穫後、子どもが「どうせ、園に帰ったら絵を描かせられる」と思えば失敗だ。楽しかった思い出を記録するか、記録するために思い出イベントを行うのか、こうしたことはありそうなので、よく考えて欲しい。少なくとも幼児にとっての体験活動は**学習活動であってはならない**。このことは(p38-39)にも示した。

快・不快は脳の生理からもよく知られている。快感は脳内でセロトニンやドーパミンが放出される。子どもに意欲をもたせようと思えば、セロトニンやドーパミンをどうすれば放出されるかを意図すればよい。つまり、楽しいことが優先されてよい。

さて、子どもは、たとえば、カエルをつかまえると持って帰りたいと言う。カエルを自身がつかまえると、あるいは誰かがつかまえているのを見ると、ドーパミンが放出され興奮し「欲しい」と思ってしまう。この状況下で、飼う・飼えないの議論をしても、気持ちを整理させることは困難だ。３０分、１時間、**さらに１時間半から２時間経過すると**、面倒になってというか、満足してしまい、「放す」という子が出てくる。先生が「もう放してあげたら」と声かけすれば、簡単に同意して「放してあげる」と言い、放すことで気分を良くすることが多々ある。

現地活動時間
1時間半の確保を
目標に

このことから、カエルを発見できるその場所に、少なくとも３０分、できれば１時間半から２時間滞在できる野外活動計画にしておけばよいということになる。即ち、飼う・飼えないの解決は子どもの課題でなく、おとな（先生）の課題ということだ。１時間半経過しても「飼いたい」と思い続けている場合の解決法はここでは示さない・示せない。私は、飼ってみるしかないと思う。だから、いきものを飼う・育てるは、むずかしい。

◇

こんな話を聞かされた。農村地域の保育園で、園長自身子どもの頃、カエルを地面に叩きつけ死んだカエルをひもに結わえてザリガニをとった。いのちの尊厳を教えたい、身につけさせた

いと思うとき、教育機関として現代では採用できない方法だろう。

小学生の高学年にニワトリを絞め、食肉を体験させる教育的イベントがある。私自身、体験がない。周到な教育課程で行うなら方法もあろうが、野外活動イベントとして生殺与奪が可能な場面は極めて限られるだろう。

枝を折ったら「イタイ（痛い）、イタイと言うよ」と擬人化して説教するのもどうかと思う。枝をなぜ折り取ったらよくないのか、向き合ってしっかり心に届くよう説くことが優先だ。

◇

飼っていて、死んだらどうするか？　一度、二度なら”お墓”も良かろう。しかし、続くなら、飼うことを止めることだ。子どもと話しあって決めたことであっても、継続観察が幼児には困難なように、飼うとなれば〈おとな（先生）〉が、死なせない・飼い続けるという覚悟がいる。シーズン中　飼い続けるのでなく、次回の野外活動で放すと決めておき、放すイベントを織り込むことが対処法になる。

お勧めしたいのは、チョウの羽化、セミの羽化だ。羽化するタイミングは〈おとな（先生）〉の経験・学習が必要だが、同時進行で、子どもと体験してもよい。

（参考）https://193pub.com/ で参照

はじめて出会う〈ともだち〉自然

① 草花あそび
② むし、ちいさないきもの
③ とり
④ 森
⑤ いのち（ まとめ ）

園庭とは、土があり砂場のある場所だ。通常は地上階にあるが、用地確保が困難な場合、屋上に配置されていることもある。地上階で確保できないときは、園庭に与えられている意味をよく理解した上で、工夫はなかなかむずかしいと思うものの日射しを浴びる心地よい時間を確保したい。

おとなが歓ぶ園庭と、子どもが楽しいと感じる園庭は違う。自然に対する見方が異なるからだ。たとえば、桜が満開になると美しい。本格的な春がやってきたと思い、おとなは心地よい。幼児はどうか。子どもの感性は〈おとなの感性〉が映りやすく、満開の桜を子どもも愛でるとは思う。一方、おとなはあまり関心をもたないが、吹きだまりに寄せられた花びらを、幼児は拾い集める。

登りやすい木がありば、必ず登る。美しく手入れの行き届いた花壇に興味を示さないが、そこにチョウが飛んできたら、必ず追いかける。花壇に踏み込みたい気分。管理され手入れの行き届いた芝生を、ある保育園で見つけた。園長に「ここは自由に子どもが入って遊べるのですか？」と訊ねると、「決められた時間だけ開放しています」とのこと。園庭の中央、園庭面積の半分を占める。見学に訪れた親たちは綺麗な園と思うだろう。この園の倉庫のひとつは鼓笛隊の楽器でいっぱいだった。有効活用されていないスペースにがっかりしたものだ。

水やり

ビオトープ

たくさんの花が美しく咲きそろっていると、水やりは誰がしているのだろうと思う。花に限らない。緑が多ければ多いほど、**水やりの苦労がしのばれる**。水やりにまっとうな報酬が払われているのだろうか。ビオトープも同様。過去の誰かの発案でビオトープを建設したが、管理が大変だ。美しく保存され機能していれば、そこには無償の労働があるのではと私は想像する。

指針や要領に「環境」項目があり、園庭の設計や運営は要（かなめ）であって付属物ではない。認可基準の広さだけでなく内容も問われなければならない。園庭に恵まれていても、後述するが「散歩」は必要だ。そして、散歩とは別に「野外活動」も必要だ。順序を変えると、散歩や野外活動への情熱を「園庭」にも向けて欲しい。なぜなら、園庭は保育の日常だから。

散歩や野外活動で、子どもは花をよく摘む。「ママにあげる」とつぶやきながら摘んでいる。「パパに……」を耳にすることもあるが、ママが優勢勝ちだ。なぜだか、わからない。手に握られた花を、園に戻ってきてからは、子どもはすぐに忘れて気にならなくなるのだが、しばらくのあいだだけでもコップなどに水を入れて飾ってあげて欲しい。

（参考）https://193pub.com/ で参照
創作はらっぱ

「はらっぱ」という言葉が遊び場を指すと体験的にわかる年代はどれくらいだろうか。記憶では、1970年代、急速に「はらっぱ」が消えた。空き地（はらっぱ）は至る処フェンスで囲われ、子どもが自由に出入りできる場所ではなくなった。

かつて「はらっぱ」が嫌われたのは、土地経済志向のおとなが価値を与えなかったこと、草ぼうぼうにしていることを日本人の清潔感（？）が許さなかった。蚊も増えるし……。〈はらっぱ〉を創作してみようと思うようになったが、嫌われない〈はらっぱ〉を創ってみたい。名づけて、「創作はらっぱ」。

「食べる」ということ

我が子には、たくさんの体験をさせたいと思う。小学生も高学年であれば、どこかに出かけたり、教育施設の体験プログラムなどに参加させてみようかと思う。幼児では、親が連れ出して一緒に遊んでみようと思う。「体験」はさまざまな場面で多用されるが、私は「体験」の価値を明らかにするために、体験を〈３つ〉に区分して提案している。

（参考）
《3つの体験》＆
ハートスケール
……26ページ

この３つめの体験を「食べる体験」としている。１つめ、２つめは、「感動する体験／繰り返す体験」でこの２つはイベント的（非日常）体験だ。これと比べて、日常体験として「食べる体験」の名称を与えている。

体験を〈３つ〉に区分した場合の「食べる体験」という名称は、**日常行為の象徴として「食べる」を採用した。**

◇

ところで、ここでは「食べる」行為としての意味、〈いのちに出会う〉に沿って述べよう。ある意味、食育と共通する点もあるだろう。

この議論は、食生活の専門家、食育の実践活動家たち多くの人々がいて、素人の私に出番はない。ないけれど、この項目を掲げておくことに意味はあるだろう。〈いのちに出会う〉というテーマを追究しているとき、食べる行為の日常が〈いのち〉そのものだから。しかし、次にあげる参考文献のように、幼い子どもがいる家庭の食卓事情は貧困問題と併せて考えれば、現代社会の極めて重大な問題だ。〈日々育ちつつある〉子どもの発達保障を思えば待ったなしだろう。園の多くは給食に力点を置いている。「いのちに出会う保育」は、「食べる」とセットであることを確認しておきたい。

食と家庭の崩壊
①『変わる家族　変わる食卓』
②『〈現代家族〉の誕生』
岩村暢子　①2003年　②2005年
……巻末

冒険と探検

野外活動施設や、子どもを対象とした遊戯施設では「ぼうけん／たんけん」を施設やイベントの名称によく使用されている。親しみやすさ基準で、深く検討したわけでないだろう。それはそれでよいが、私はその延長線上で使用していない。

冒険は
多くの支援で
成立する

前人未踏の冒険や単独行と報道で知るとき、補給が無いなど冒険の過酷を想像する。しかし、実際は多くの支援を受けて「冒険」は成立している。資金や資材確保の支援によって冒険は支えられている。冒険者がめざそうとしていることに、冒険の当事者でない多くの人が目的に賛同している。探検は、過酷・危険について冒険と差異のないこともあるが、学術探検とも称されるように、未知の分野を開拓しようという研究心でもって周到な計画が用意され実施に及ぶ。

胎内から生まれ出ようとするとき、その出産において、母も子も冒険なのだ。産科の医師は先進国の日本においてもそのように認識し教育されている。子が誕生したとき、母の無事を同時に確かめ安堵しているはずだ。

あかちゃんは、いのちを生ききるために五感をフルに活用している。――あかちゃんは冒険家として生まれた――と私は形容している。その冒険家は、愛という名の支援を受け、やがて探検家になる。**園庭を裸足で這うあかちゃんは冒険家で、山道を歩く幼児は探検家なのだ。**だから、〈おとな〉は、冒険するあかちゃんや、探検に臨む幼児を、後方からサポートしよう、と呼びかけたい。

（参考）https://193pub.com/ で参照
ヤノマミ編　〈 母に抱かれて人間となる 〉
あかちゃんは”冒険家”として生まれた……21ページ

野外活動での危険

危険を警告されるにしても、的確な指摘があると参考になると思う。幼児の活動可能な範囲では〈スズメバチ〉が最もリスクが大きいだろう。それも９～１１月の時期で、他のシーズンはリスクが少ない。となれば、スズメバチを同定できるよう形態や生態を知る必要がある。

マムシは「こわい」とよく言われる。マムシに対しては、極めて接近した場合に危険で、それも踏みつけたり、潜んでいる石や岩を取り除いたときに襲われるなど、つまり至近距離に限られる。幼児の行動でそのような危険に遭遇することは想定しにくい。勝手に草むらに入らないとさせるだけで回避できる。

動物に出会うことの危険よりも、溝に落ちたり、川・池などでの水難事故に遭うリスクのほうが大きいだろう。子どもの用心深さでもって、落ちそうな「土の道」の端は歩かないが、コンクリートで固められた道の端が断崖であっても、そこは歩いてしまう。友達とすれ違うなどで衝突し暗転と化す。

気づきにくいが、背負う荷物の重さ、つまり、リュックサック重量を軽くして身軽にしておくことが肝要だ。2500グラムを限度とするのがよいだろう。

下見は必須

危険回避で最も有効な対策は、目的地の下見とそれに基づいた活動計画だ。面倒がらず**下見と計画をおろそかにしない**ことだ。

◇

野外活動において遭遇しやすい危険に留意しつつ、積極的な活動を行うには、一定の知識が必要である。紙面では限りがあるので、書籍やwebサイト等で研鑽をお願いしたい。　（参考）https://193pub.com/

野外活動で危険を回避するには¶

要点 1:「不快」と「危険」の区別をする。

2: 事故は複数の原因があわさって起きる。

3:「こわい」を強要しない。

励ますことがケガにつながる。

4: 行動中の体力回復は早くみえても、

翌朝に熱を出しやすい。

5: 熟知した上で、危険を恐れず。

野外活動で遭遇する動物などの危険¶

要点 1: スズメバチ、クマバチ、アシナガバチなどハチ類

2: 野犬やイノシシに出会ったら

3: マムシ・ヤマカガシなどヘビ類

4: 道に迷う危険

5: 動物の死がい

6: 泥だんご遊び、はだし保育への対応

7: 新型コロナウイルス

8: 破傷風

9: 蚊に刺されないようにしてください

…… 保護者の要望に応える

10: アブとブヨ —— その他

世界観を育てる「散歩」

子ども時代によく遊んだ場所を訪ねたとき、（こんなに近かったのか！）の思いをしたおとなは多い。幼児・小学生は、その**行動半径が世界観**だ。世界の広さを感じるということは、文化とその価値を身につけるということだ。園庭が広くて魅力のある場所であっても、**園から飛び出すことが大切**なのだ。

子どもの列に車が突っ込むという痛ましい事故が起きている。事故を回避する責任は引率する側にもあるのだろうか。車と人が交差しないまちづくりを求めたいが主張するに留めよう。

３歳児は、どれほどの距離を歩く・歩けるのだろうか。５００メートルがやっとで、親子で歩けば抱っこをせがむだろう。一方で、２キロの山道を歩く幼児に出会ったこともある。散歩のもつ意味は深い。

散歩で列をなすとき、前方と空きすぎない適度な間隔で歩いて欲しい。これがなかなかむずかしい。自分が遅れている、空きすぎた間を詰めようとする動作を、５歳児クラスは出来るが、４歳児クラスでは乱れがちだ。このことは「他者／自己」と関係するのかもしれない。不注意から列が乱れるのではなさそうだ。

「行動半径」という話をしよう。もとは軍事用語で軍艦や軍用機が燃料補給しないで往復できる距離の片道のこと。これが社会生活に転用され、知的空間または地理的範囲（距離）につかわれる。これを、子どもに援用しよう。

子どもの、行動半径と世界観

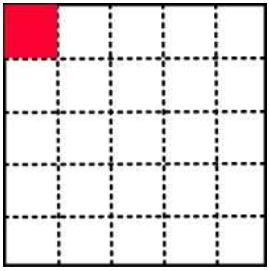
かつて、子どもの行動半径は500mあったという。それがやがて100mになった。「かつて」に根拠が得られず、1955年頃から10年間と私は推測している。これを基に児童公園（現在では街区公園の呼称）が計画配置された。法律で定められ全国に児童公園が整備された。子どもの遊び場に供する目的だったが、さて出来上がると子どもの

姿が少なかった。それで調査したところ（誰が調べたのかわからない）子どもの行動半径が100mになっていると私は知った（これもどこで、または何で知ったのか思い出せない）

子どものとき「遠いところ」と思っていたのに、おとなになってみると「近い」と気づいた経験は誰にもあるだろう。

◇

ところで、今子育て中の親たちは1980～1990年とその前後に生まれた人たちだろう。すでに行動半径が縮まってしまった世代だ。だから、以下説明に迷う。実感が伴うだろうか？



500から100は5分の1だが、面積では25分の1となる。子どもは500mまたは100mを遠いと思う。それがおとなになると近いと感じるようになる。空間認識＝世界観がおとなになることで拡がるということだろう。さまざまな（楽しい・怖い・おもしろい）体験を積みながら世界観が拡がる。子どもからおとなになる過程ではなく、その出発となる〈子ども〉は**時の流れとともに**同じ〈子ども〉でない。かつての子どもの世界観は、その後に25分の1になった。

不登校・いじめなど､子どもをとりまく環境の要因は、行動半径の変化も影響しているのではないか、と思う。

◇

では、どうしたらよいのか。日本の住宅事情やその配置、生活や消費（清潔志向・商品物流を含め）は均質化され、世界観を醸造するには負の効果でしかない。子どもの発達を促す環境は貧しくなり、子どもの自力では無理だ。親の休暇でもって、環境の違うどこかへ連れ出すしかない。均質なテーマパークを控えめにして、たとえば閑静な田園で五感をフルに生かせるときをすごすことが求められると思う。

遊びの
何が大事なんやろ？

　某大学人間発達学部の大学院生から、修士論文作成にあたって依頼文をもらった。2012年のこと。

じつに200回以上

―― 幼児教育にとって遊びが大切な事は自明のように思われ、幼稚園教育要領にも、保育所保育指針にも、「遊びは、遊ぶこと自体が目的であり、～……」とその考え方も明確に出ており、遊びという文字は実に200回以上（要領275回、指針226回）登場してきています。けれども、保育者養成のカリキュラムには「遊び論」という科目はおかれていません。そこに注目し、遊び観と実践の関係にも着目しながら研究を始めています ―― と依頼文は続く。〈遊び〉の掲載数をよくも数えたものだ。ちなみに、私が自分で名づけた保育士養成校での担当科目は「自然と外遊び」である。

　養成校の学生は「どの先生も似たようなことを言う」と言う。〈遊び〉の大切さは、講師間で共通しているだろう。だから、上記の数字になるのだ。

遊びの
どこに着目するか

　では、そのキーワードになる〈遊び〉とは何なのか。関係する文献を開いて、遊びの定義から始まるときは、おもしろくない。遊びの解釈や定義を並べたところで、保育士をめざす学生に役立つと私は思えない。すると、持論を展開するものになってしまう。私の、この一連の書きものも**持論の類いと言われてしまう**懸念もある。重要とされながら〈遊び〉を容易には説くものがない。〈遊び〉のどこに着目するのか、ということになるのだろう。

そこで、具体的に〈遊び〉銘柄をとりあげ、必要に応じて整理を試みたのが、以下の《遊びのアイテム》。

以下は、https://193pub.com/で確認してください。

下向き目線のとき、幼児は思考する

土を集める幼児

掃除ロボットを追う乳児

伝承あそび

あやとり / おはじき / おてだま

しゃぼんだま

おおなわとび

火をつかう

時計で炊く、飯盒炊爨 はんごうすいさん

やきいもパーティー

創作はらっぱ

おなもみダーツ

草笛　ぴーぴーまめ、カラスノエンドウ

浜・なぎさ（海）であそぶ

水のあるところであそぶ

階段道（山）……幼児は、なぜ山登りが平気なのか？

道具/素材

はさみの指穴には、どの指を入れるのか？

土・砂、砂場であそぶ

幼児が保育で夜を体験できるのは、お泊まり保育だろう。日没時刻を事前に確認しておき、おひさまが沈んでいく景色を楽しもう。数分で体験できるので、お勧めだ。

昼と夜の自然観察は幼児には無理がある。夜は危険が増えること、変化やその比較は荷が重い。変化を楽しむ程度にしておきたい。〈昼と夜〉と題した理由は、このような対照を多くとりいれるとよい。

たとえば、……

葉の〈表と裏〉
木の肌の〈ツルツルとザラザラ〉
森のなか〈明るいところ、暗いところ〉

スズメとハト〈歩くとき、足をどうしているかな？〉

スズメは跳ぶ
ハトは歩く
カラスは両方

山の頂上から見える景色
谷は水が流れている、の体験
仰向け（ねころんで）空を見る。

視点を変えることで、フィールドの活用が倍加する。いのちの多様性を感じとることは〈他者〉の存在を認めることになり、そのことが〈自己〉の発見にむすびつく。〈自己の発見＝内言〉を蓄えておくことは、未来に、飛躍を約束するだろう。

（参考）体験活動 stage……巻末

野外体験活動保育計画 —— 花緑命水

「散歩」は計画の対象外。「世界観を育てる〈散歩〉」（p63）にその必要を記したので、３歳児をメインで計画、実行されたい。ここでは、４歳児と５歳児を念頭においた計画になる。

野外活動の目的は、マニュアルに示した「五感／生命（いのち）／共感」だが、これを実現させるには具体的な行動目標が必要だ。経験豊富なスタッフが担当するだけでなく、日頃から子どもたちの性格などを知り尽くしている担任保育士らとの共有が大事だ。

私は過去、中国人指導者に、保育における野外活動をどのように説明すれば習得しやすいだろうか思案し、漢字１文字で表現することに辿りついた。《花緑命水／空香風食／色星火光》12の漢字で、子どもの発達に必要な要素が表現できる、と思う。

４月に花をあて、３月に光をあてている。４月に桜の花が開きやっと暖かくなってくる。草木の芽吹きが盛んになり、常緑樹は落葉盛んとなり新緑の季節となる。毛虫がぞろぞろ這い出てくる頃、野鳥は子育てに忙しい。命が育つとき。—— というふうに、考えた。季節は進み、２月は寒い。だから、火が欲しい。寒い中でも日中の時間が長くなり、太陽（光）は地を暖める。進級、進学の季節、光が感じられるときだ。

◇

子どもは花の如く輝き、枝葉の緑が伸びる如く育つ。森で命を育む営みがあり、清き水は音を放つ。空高くまで香りを届ける風に誘われ天地を旅し、遊び、食べる幸せ。変化自在の色に気づき、さらに求めて夜空を仰ぐ。天空あまたの星は太陽を産み、燃え盛る火は光

色(しき) 空(くう) 花(か)
星(せい) 香(か) 緑(りょく)
火(か) 風(ふう) 命(めい)
光(こう) 食(しょく) 水(すい)

12	8	4
1	9	5
2	10	6
3	11	7

と為し子どもを育つ。

該当する月とそれに対応する漢字に拘らなくてよい。通年でかまわない。ただし、それだと散漫になって忘れたり身につきにくいので、たとえば、６月には「命」を考えようと意識するのがよいかなと思う。

「いのちに出会う保育」野外体験活動保育　年間計画（兼 144要素集）※気候は関西基準

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
月間基本テーマ		花	緑	命	水	空	香	風	食	色	星	火	光	
テーマ補完語		入園・進級 草もち おひさま、まぶしい	暖かさが安定する ダンゴムシどこにいるかな？	野鳥の子育て、毛虫 雨ふりも楽しい カエル	夏はやっぱり水遊び ささ舟 セミの合唱	灼熱の夏 大きな木の日陰	ヒガンバナ 大きくなったバッタ	実りの秋 いも掘り	食欲の秋 どんぐり拾い 紅葉	日暮れ、星が見えるかな？ リース作り	お正月気分	寒い！ 水で遊ぼう たき火 やきいも	卒園 ツクシ	
クロステーマ↓		春		つゆ	夏			秋			冬		早春	
５歳児 ４歳児	花	1	13	25	37	49	61	73	85	97	109	121	133	花
	緑	2	14	26	38	50	62	74	86	98	110	122	134	緑
	命	3	15	27	39	51	63	75	87	99	111	123	135	命
	水	4	16	28	40	52	64	76	88	100	112	124	136	水
	空	5	17	29	41	53	65	77	89	101	113	125	137	空
	香	6	18	30	42	54	66	78	90	102	114	126	138	香
	風	7	19	31	43	55	67	79	91	103	115	127	139	風
	食	8	20	32	44	56	68	80	92	104	116	128	140	食
	色	9	21	33	45	57	69	81	93	105	117	129	141	色
	星	10	22	34	46	58	70	82	94	106	118	130	142	星
	火	11	23	35	47	59	71	83	95	107	119	131	143	火
	光	12	24	36	48	60	72	84	96	108	120	132	144	光
連携		〈5領域：健康　人間関係　環境　言葉　表現〉と特色保育						年間行事／保護者への働きかけ／地域への働きかけ						

年間／月間計画

表タイトルに「要素集」とあるのは、漢字要素12文字の縦横クロス144のセルに相当。計画立案の際、ヒントをメモ書きするなど活用されたい。なお、記入用白紙（エクセル形式）は、https://193pub.com/ でダウンロード可。

漢字要素はヒント程度に利用すればよい。

その都度の「実行計画」

野外体験活動計画

実行日	担当者承認枠
目的地	
ねらい	
経路（概略）	
引率者	※携帯電話 電波状態確認済
携行するもの 服装・衛生用品	

時刻	環境（留意点）	子どもの活動	援助・配慮

季節区分（6季・関西版）

4季でなく6季を採用

2/19　4/2　6/11　7/17　9/11　12/4　2/19

早春　春（初夏）　つゆ　夏（晩夏）　秋（初秋　晩秋）　冬（初冬）

立夏　立秋　立冬　立春

季節感をつかむには、こちらを↓参考に。

https://193pub.com/　季節週 / 年52週 / 六季

厳しい冬から桜で象徴される春のあいだ、近づく春を感じさせてくれる季節がある。それが「早春」だ。いのちの発見に多く出会える。「梅雨」も区別すると六季になる。つまり、「四季」でなくてよいということだ。住んでいる土地で違う。四季にこだわらないでほしい。

おわりに / 1　〈いのちに出会う〉は〈ともだちに出会う〉と同じ

この「おわりに」に到達するまでに、私は50年かかった。50年前の1970年代当初は〈いのち〉と〈ともだち〉に接点はまったくなく、「生きている証拠を見つけよう」をテーマにして自然を探索していた。自然に気づく、または、自然を感じる体験は小学１年生でも遅いと思い、1970年代後半、自ら保育の世界に飛び込んだ。にもかかわらず、〈いのち〉（＝乳幼児）はすぐそばにいたのに、そういう観点はなかった。そして、この論考、「いのちに出会う保育」を記すことで、やっと〈いのち〉と〈ともだち〉が結びついた。

あかちゃんは心を豊かにし、まずは自己に気づく。鏡に映る自分は、しかし、後に気づく自己とは異なる”自分”だ。間主観性という表現で、およそ３歳までは母と一体なのだ。生命体として不思議な世界だ。

年齢の数で遊ぶ

乳幼児は〈自身を含めて、年齢の数で遊ぶ〉と、私は捉えている。間主観性を学んだ今、０歳、１歳から自身を引き去れば、マイナスか０だ。つまり、〈ともだち〉は生じず、その数値が間主観性を表す。２歳になって、２歳－１（自身）＝１人となり、１人の〈ともだち〉を得る。これは真に〈ともだち〉だろうか。まだ、間主観性が勝っているのだろう。３歳になって〈ともだち〉は２人となり、〈他者〉がその姿を現す。４歳の誕生日が過ぎると「心の理論」では、〈他者〉＝〈ともだち〉がわかるようになるという。多くの実験データーが実証している。

野外活動で、散歩で、花を摘み、チョウを追う。カエルを初めてつかみ、つかめるようになった自分に気づく。

これ以上くどく説明する必要はないだろう。〈他者〉に気づかされる〈自己／自分〉がいる。〈ともだちに出会う〉は〈いのちに出会う〉と同じなのだ。

おわりに / 2

子どもをとりまく環境の、時間軸的考察

遊びの必要条件は「三間」といわれる。①仲間 ②時間 ③空間。遊ぶ仲間としての友達、あそんでいる時間、遊ぶ場所（空間）。学齢に達すると、この３つの条件は、すべて欠くのが現代だ。保育園では、条件がそろう。保育園時代でそろっているものが、学齢に達するとすべて欠く。指針や要領で大切とされている遊びが、小学生になると大切でなくなる、ということはない。こうした断絶的環境変化は、おとな社会の責任、課題であろう。

３つの条件がそろわなくなったのは最近ではなく、私の子どもの頃から始まっている。一つはクルマ社会。一つは欲しいものが簡単に手にすることができる”豊かさ”がもたらした。こうした世の中で育った子らが、すでに子育て世代になっている。保育士の大半は、十分に遊んできた世代でない。だから、こうした考察や議論は、”評論”に流れやすい。

１年の成長が貴重で、今まさに育ちつつある子ども（乳幼児）を目の前にして、私は評論家でありたくない。遊びに困難な時代であっても、では、今、何が子どもたちのために出来るかを問い続け、実践する手を止めたくな

い。

2019年12月に始まる新型コロナウイルスによる災禍に全世界が襲われ、今も勢いを増して感染が拡がっている。感染を拡げないためには、人と人との出会いを制限しなければならない。外出はままならず、公園で遊ぶ自由も奪われている。〈他者／ともだち〉と出会わずして、その頻度を少なくして、どうして心を豊かにすることができようか。

コロナ禍の今だからでなく、子どもが育つ遊びの環境を、なんとかして回復させたいもののさらに後退を余儀なくされるのは、つらい。

子ども苦難の時代といってよいだろう。〈豊かさ／便利〉と引き換えに子どもが犠牲になっている。これを評論に終わらせないために、〈継続して行う〉を条件に、実行できそうなことに着手して欲しい。

（参考）https://193pub.com/
「豊かさ」を問う《時間軸で考える》

涙の跡とレジリエンス〈立ち直る力〉

涙で気持ち（心）が癒される。幼児は、泣くことで立ち直れる。それには条件がある。

まず、しっかり泣くことだ。と言いながら「しっかり＋泣く」には形容矛盾がある。泣いている本人に、「しっかり」は使えない。十分に泣くことが大切だ。泣きたいときは泣きたいだけ泣けばよい。泣くことで、立ち直れる。

ここで、おとなは間違いを犯しやすい。泣いている最中に「どうしたの？」と声かけしてしまうことだ。あるいは、何やら話しかける。泣きたいのだから、泣かせておけばよい。泣くことで、立ち直れる。さっきと、同じ言い方だ。

立ち直ってから、尋ねよう。「どうしたの？」。涙声で何を言っているのか、よくわからない状況を避けることができるし、おとなの”通訳”も必要ない。

幼児であっても、おとなの心を読み解いていて、泣くことでおとなが声かけしてくれ、自分の味方をしてくれるという算段だ。泣きやむのを待っているのに、祖父母がかばい始めてしまう。その逆もあるだろう。立ち直るチャンスをおとなが逃していることになる。幼児期の特典は、泣くことで自らを癒し、立ち直る。また、同じ言い方で終わった。

レジリエンスという聞き慣れない（見慣れない）用語がある。最近、目立つ。「子育て」だけでなく、社会人教育・企業研修でもつかわれているようだ。

子育てのハウツー本で、レジリエンスを扱ったものを

みかけた。子育ての難しさを思ってしまう。「立ち直る」は、子どもの成長過程でとても大切だ。「立ち直る」必要は、毎日のように、頻繁におとずれる。その大切なことを、本で学ぶ時代になったのかと思ってしまう。

ミネルヴァ書房が発行する「発達」誌145号（2016年）の特集は「子どものトラウマのケアとレジリエンス」だ。トラウマとの対比でレジリエンスがとりあげられている。

大地震のときの被災や近い人の喪失、恐怖体験など、極限状況で心理ケアの対応が必要だったものを、負としてでなく、前向きにとらえようという論点だ。非日常を想定した用語だと思うが、レジリエンスを軽々につかい、ハウツーとして仕立てていることに、がっかりする。

涙の跡をのこしながら懸命に生きていく姿は、子どもを頼もしく思えるときでもある。成長や発達に期待できるシーンにもなる。「レジリエンス」は、むずかしい用語に思えるが、「立ち直る力」と読み換えることで、格別むずかしい用語ではない。

フラン・ピンタデーラ/文　アナ・センデル/絵　星野由美/訳
絵本『どうして なくの？』偕成社 2020年

解説ページの「なみだのおもさ」が、とりわけいい。その一部――イタリア人作家で教育者でもあるジャンニ・ロダーリは、ある物語のなかで、なみだはどれくらいのおもさなのかという問いかけをして、つぎのようにこたえています。「気まぐれな子どものなみだは風よりもかるく、おなかをすかせた子どものなみだは地球よりおもい。」

自閉症スペクトラム障碍の子ども

ウタ・フリス（2003年）『新版　自閉症の謎を解き明かす』を読んだ。自閉症に関心があって読んだわけでなく〈心とは何か〉を考えているうちにこの本に辿りついた。自閉症の症状は様々なタイプがあって、知的な遅れが著しい重度から映画「レインマン」で主演ダスティン・ホフマンが演じた高機能障碍に至るまでその幅は広く、同じ障碍とは思えない。しかし、共通するのはコミュニケーションの障碍。〈心の共感〉が成立しない。自閉症は今日では「自閉症スペクトラム」と名称が変更されている。

「生まれたときは普通だったのに……」と回顧する親は多いらしい。１歳前後になって少しおかしいかなと思っても個性と思い、２～３歳になって定型発達する子どもらとの違いを強く意識するようになるという。

自閉症の原因はいまだにわかっていない。しかし、研究者のほとんどはなんらかの脳機能障碍をもって生まれたとしている。うぶごえをあげて生まれ、母を認め、周囲に関心があるかのようなまなざしを向ける。定型発達児は生後２、３年の間に言葉を飛躍的に覚え、行動範囲を広げてゆく。自閉症スペクトラムの子どもは、必要最小限の言葉に留まり、日常の変化についてゆけず、関心を示す態度は「こだわり」に見えてくる。

自閉症スペクトラム障碍の子どもは、ほんとうに〈コミュニケーション〉がむずかしいのだろうか。〈心とは何か〉〈コミュニケーション〉とは何かに舞い戻る。

自閉症とされる東田直樹さんを舞台（宝塚市のホール）で拝見したことがある。司会者と東田さんはコントのようなコミュニケーションを交わし、場内を沸かせた。笑い、驚き、感心・関心がうずまいた。場内からの質問を受けた。そのひとつ。「一番落ち着くところはどこです

か？」「（自分の）部屋」。これは立派なコミュニケーションだ。

２～３歳の判定を待たず、あるいは、そのような判定があったとしても、乳幼児期の発達に必要なことは、障碍があってもなくても、定型発達児と同じではないかと思う。そう思いたい自分がいるだけかもしれないが、野外活動の実践をともに体験して、それなりの発達を感じられるようになった子どもと出会ってきたことだけは確かだ。

食と家庭の崩壊 ―― ２冊の本で考える

① 岩村暢子 2003年『変わる家族 変わる食卓』
副題：真実に破壊されるマーケティング常識
② 岩村暢子 2005年『〈現代家族〉の誕生』
副題：幻想系家族論の死

子どもが変だ。奇妙な社会現象が起きる原因は、なんだろうか？　子どもが育つ「家庭」に問題があるのだろうか？　こんな疑問に、マーケティング調査を行う広告会社（アサツー･ディ･ケイ）のチームが取り組んだ。名づけて「食DRIVE調査」。

商標登録も済ませている調査名称「食DRIVE」は、それ自体がユニークだ。「食DRIVE」調査とは「首都圏

に存在する1960年以降に生まれた〈子どもを持つ〉主婦を対象として、毎年実施してきている食卓の実態調査」（『変わる家族 変わる食卓』）。

調査は1998年から2002年の5年間に行われた。調査対象者111人。調査された食卓数2331。

◇

調査は、3つのステップにわたる。

第1ステップは、「食事作りや食生活、食卓に関する意識や実態などについて質問紙法で尋ね、回答後回収する」。いわゆる「アンケート調査」で、この第1ステップは、ほかでもありそうな調査だ。

では、食卓の実際を見せてよ！ と、1週間分、朝昼晩の3食全部「使用食材の入手経路やメニュー決定理由、作り方、食べ方、食べた人、食べた時間などを日記と写真で記録してもらう」のが、第2ステップ。うわっー、そんなん見せられへんわ（調査は関東地方なので、関西弁ではありません（_ _））、と思った人もいると思うが、本書には確かにその証拠写真たちがたくさん掲載されている。調査はしつこくまだ続く。

多少は体裁をつくろえた第1ステップのアンケートと第2ステップの食卓日記と証拠写真をつきあわせ、これ、おかしいやないの？ と「詳細面接」を敢行！ これが第3ステップ。

調査された人たちの年齢は、1960年以降生まれ、つまり調査時点で40歳前後を年長にしてそれより若くなり、30歳代がメインと推定される。なぜ「1960年以降生まれ」かについては、明確な説明はないが、これを仮説的に設定することで「子どもが変、奇妙な社会現象」などの謎を解く優れたアイデアだ。「家族のあり方や関係を明らかにするための定点観測の場として」食卓に注目したと、説明されている。

『変わる家族　変わる食卓』

この本を読むと、びっくりする食生活（＝食卓）ばかりで、ホンマかなと驚いた。「私」の食卓と同じまたは似たようなものではなく、まったく違うからだ。さりとて、では、他人の、あからさまな飾らない日常の食卓を見ることはできない。それだけに、周到なこの調査「食DRIVE」は貴重であり、衝撃的だ。著者も、「いま家庭の食卓の激変ぶりは若者や単身者の食実態以上にショッキングである」と記す。

この本のどこを開いても、それを見ることができる。114ページの写真には、こんなキャプションがついている。パン嫌だ、ご飯嫌だという子どもたちの要求に応えて家族全員の朝食がタコ焼きとジュースになることもある。さすがにこれは変だと思える。

洗い物を出したくないので鮭フレークもタラコもパックのまま出す。(p54)

スーパーの帰りは目的がなくてもコンビニに寄るのが楽しみ。私１人の昼食をコンビニで買った。そばと鱒寿司のおにぎり。(p139)

１日１回納豆を食べることにしているので、インスタントラーメンのときにも納豆は欠かさない。(p166)

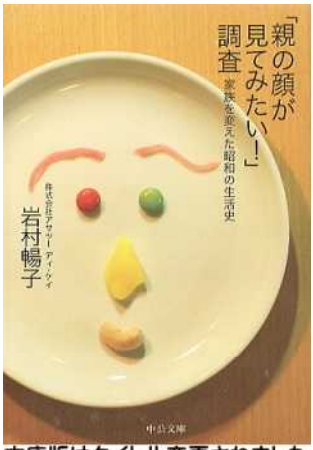
なぜ、こんな食卓なのか？　と、被調査対象者に面接で詳しく尋ね、綿密･詳細に記されている。あなたは、この本を読んで、そんなもんだろうと相槌を打つだろう

か、それとも、すさまじいともいえる食の荒廃に危機を感じるか。

◇

1960年以降に生まれた人たちの、その「親の顔が見てみたい」。どんな子育てをしてきたのだろう？ という調査をした。そのレポートが続刊で、次の本だ。

『〈現代家族〉の誕生』



文庫版はタイトル変更されました

「その親たち」は、戦前に生まれ、「戦後」を体験した世代だった。食（＝食卓）は、親から子へと受け継がれやすいが、その親たちは「戦前・戦後」の、価値観の転換点に立っていただけに、「受け継がれていなかった」という結論を導いている。

その親たちへの調査は、「食DRIVE」と整合させるため、直接面接の方法をとっている。面接できたのは40人の親たち。その証言がくどいほどに収められている。「証言」を裏付けるために、国民生活白書などで歴史的事実をトレースしている。たとえば……。

インスタント食品やカレールーなど加工食品などが誕生した時期、電子レンジなど家庭電化製品が開発された時期、マクドナルドなどファストフードが拡大していった時期、等々、食生活の起源を明らかにしている。

結論らしきものは、今の若い親が原因で食が崩壊したのではなく、若い親の、さらにその親たちの段階で、すでに崩壊しつつあったということだ。

◇

ところで、大変克明にもかかわらず、すっぽり抜けている点が少なくとも２つある。

1950年代から60年代にかけて、水俣病・森永ヒ素ミルク事件などが発生し、国民の知るところとなっていた。全国各地には消費生活の相談コーナーがあった。豆腐の防腐剤AF2（エイエフツー）は大きな社会問題になった。有吉佐和子の『複合汚染』が新聞連載されたのは1970年代。この小説や、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』、そして、アメリカの消費者運動のリーダーであるラルフ・ネーダーなどの影響下で、日本でも消費者運動が起きた。

このような動きに共鳴した「その親たち」も少なからず存在した。そういう分析がまったくない。調査が克明であるだけに少々奇異に感じる。食の崩壊に歯止めをかけようとする社会的な動きが、一方にあったことは事実で、そういう視点がみえない。

もう1つは、家庭での、女と男の役割だ。『変わる家族 変わる食卓』の「まえがき」で、この調査は主婦を対象として行っているため、主婦の発言、主婦の行動ばかりがここでは取り上げられているが、それは決して「食事の支度は女がすべきものだ」と私たちが考えているからではないと、断りがある。しかし、家族（家庭）を論じるには、男がかかわってこなかった時代背景の分析が必要だ。現代の食（＝食卓＝家庭）の崩壊は、事実であることを認めたとしても、もう一方で、崩壊しなかった家庭もあるわけで、その説明が本書ではできない。これだけの調査をしていることから残念だ。

◇

懸念も指摘したが、現代社会を考えるに、この2冊は類書のない好著といえる。

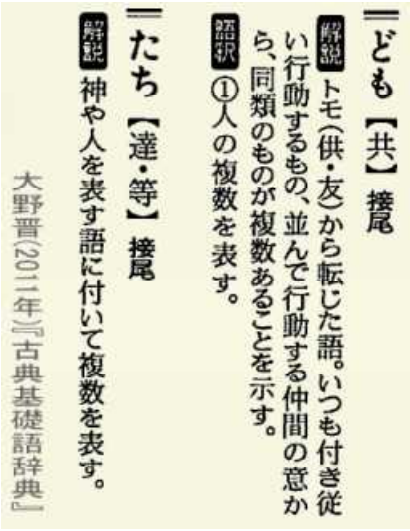
※単行本は勁草書房から、文庫本は中央公論新社から刊行された。

子供、子ども、子どもたち、等々の表記について

保育などkodomoと関わる仕事に長年携わってきた人たちでも「kodomo（子供等）ってどう書いたらいいの？」と疑問に思い、的確に答えられないことは多い。「kodomoはお供ではありません」と「供」の使用を好ましいとしない主張を耳にしたこともある。そのためだろうか、保育の世界では「子供」の表記は少ない。

大野晋編（2011年）『古典基礎語辞典』に「こども/子供」の見出しがあり解説は次のとおり、「コ（子）に、複数を表す接尾語ドモ（供）が付いた語。」とある。

同辞典の見出し「こ/子」は示唆に富む。――小さい意を表す接頭語コ（小）と同根。古くは親から見た、息子や娘の意。コ（子）が大人に対する小児の意を示すようになったのは新しく、例も少ない。大人から見た小児はワラハ（童）・チゴ（児）という。――引用終わり。さらに見出し「こ/小」を探求するのが好ましいが、ここでは省略する。

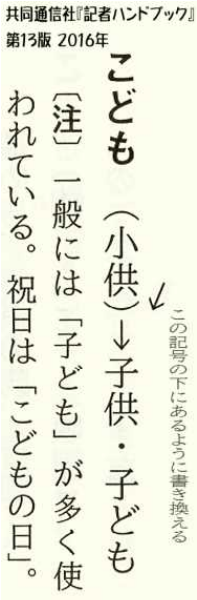


では、「ドモ」を調べてみよう。「トモ」ではなく「ドモ」と濁音になっていることに注意して同辞典で調べると、「ども/共」が見つかった。――トモ（供・友）から転じた語。いつも付き従い行動するもの、並んで行動する仲間の意から、同類のものが複数あることを示す。――引用終わり。語釈の筆頭に「人の複数を表す」とある。

国語国字問題をここでするつもりはなく、実用的な表記はどうあればよいかという道筋をここで検討したい。

仮名で書くか漢字で書くかの選択より以前に、「（音として）ども」は複数をあらわす。漢字表記以前にkodomoは複数であり、しかも、「いつも付き従い行動するもの」ということである。kodomoの語の成り立ちからして、常に複数としてとらえられ、固有の人格として認識されてこなかった、ということだろうか。

kodomo一人一人を分けて人格として認め、個を尊重するという認識でkodomoに向き合うとき、kodomoをどう表記・表現すればよいのだろう。


共同通信社『記者ハンドブック』第13版 2016年

こども（小供）↓子供・子ども

この記号の下にあるように書き換える

〔注〕一般には「子ども」が多く使われている。祝日は「こどもの日」。

童や児で表現されていた過去は、もしかしてkodomo一人一人の人格が区別して認められ大切にされ（あるいは、そうでないかも）、「コ＋ドモ」と表記する場合は個々を区別しないということか。

「子供・子ども」どちらも複数であり、どちらも「お供」である。お供でないkodomoを表記する方法は「子」と漢字１文字で書けばよい。複数表現のときは「子たち」「子ら」という表記法がある。「子どもたち」という表記は「子ども」＋「たち」と複数を重ねていることに気づくだろう。

言葉にこだわりながらも、理解や認識が伴えば、表記は自由であって拘束されるものではないと私は考えている。だから、kodomoをどのように実際に（実用的に）表

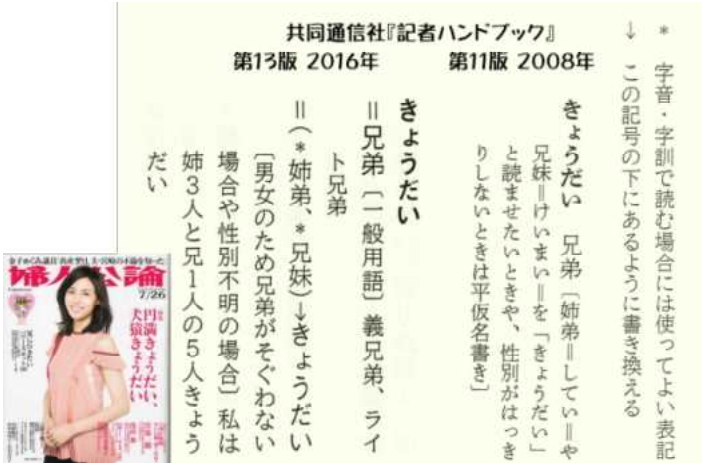
記するかは自由である。だが、kodomoとのかかわりで専門性を問われる立場にあるとき、kodomoの表記・表現は、いつも悩み続ける課題であってほしい。

※付記 ===

表記「**子ども達**」もよく見られる。常用漢字表の「付表」では「友達／ともだち」の表記が認められており、「達」は「友達」において「だち」の読みが与えられている。正確には「友達」には「ともだち」の読みが与えられていて、「とも＋だち」と分けて認められているのではない。さらに、「達」は、常用漢字表で認められている読みは「たつ」のみ。したがって、「こどもたち」を「子ども達」と表記することは、内閣告示としては誤りである。公用文でない限り、一般に慣例としての使用が誤りというわけではない。

「きょうだい」は、かな書きでよい

兄弟、姉妹、兄弟姉妹、兄妹、姉弟など、みなさん思案していろいろと表現してきた。―― が、「きょうだい」は、かな書きすることが一般的になりつつあるようだ。



＊字音・字訓で読む場合には使ってよい表記
↓この記号の下にあるように書き換える

共同通信社『記者ハンドブック』

第13版 2016年

きょうだい 兄弟（一般用語）義兄弟、ライト兄弟
＝兄弟（＊姉弟、＊兄妹）→きょうだい
（男女のため兄弟がそぐわない場合や性別不明の場合）私は姉3人と兄1人の5人きょうだい

第11版 2008年

きょうだい 兄弟（姉弟＝してい＝や兄妹＝けいまい＝を「きょうだい」と読ませたいときや、性別がはっきりしないときは平仮名書き）

婦人公論 7/26

体験活動 stage

幼児を対象とする野外体験活動はその実現のためには、あかちゃんのときからの準備、考え方が必要と思う。年寄りのノスタルジアになるだろうが、縁側で昼寝するあかちゃんが蚊にさされないよう、うちわで仰いでいる婆さんのおもいやりを想い出す。サッシで閉じられた空間をエアコンで温度調節するのでなく、涼しい風にあたっているあかちゃんを幸せに思う。施設型保育では望むべくもないが……。

裸足（はだし）の子が大きくなってチョウを追いかける。庭の石を起こせばミミズが跳ねる。野外に Debut（デビュー）。いつも通る道、いつも遊びに行く場所へと行動が拡がってExplorer（冒険家）。そして、就学前になれば年長者に誘われて Challenger（探検家）になる。

体験活動 Stage			
Stage名	Debut デビュー	Explorer 冒険家	Challenger 探検家
対象満年齢	2歳7か月～4歳未満	4歳～5歳未満	5歳～小学2年生
幼児クラス	3歳児クラス	4歳児クラス	5歳児クラス
フィールド	身近な周辺	定点（＊）	移動（＊＊）
成長の見方	他者の発見	他者の理解 心理化＝心の理論	自己は他者の存在で規定される 心の理論

＊定点……年間を通じて同じ場所で活動する
＊＊移動……定点に限らず移動も可

フィールドについて……「野外」に出れば、そのすべてが「体験」になるとは限らない。3・4歳児の幼児を、おとなが好きに連れ出せば、子は「ついていく」だけとなる。子ども自身にとって活動のそれぞれに、目的が明確である必要がある。これを主体性という。5歳児からは「移動」が彼らの世界を拡げる援助となる。

野外における体験活動保育
運用指針（ひな形マニュアル）

このマニュアルは私家版（山田利行提案）です。50年に及ぶ個人的な経験から編んだもので完全とは言えません。もし事故が起きたら……の懸念で踏み切れない園の声もあります。一方、遊びの必要とその重要性を認識している園も多くあります。マニュアルに則しているから安全とは言えません。園みずからが実践を重ね、乳幼児の発達に対する理解で裏付けし、園庭での遊びや散歩を含めて発達の礎に貢献して欲しいと思います。

このマニュアルでは「軽度のケガ」を定義する試みを行っています。保護者の理解をどう得るか、課題と思います。

—— 目次 ——

1: 総則（目的ほか）
2: 安全の確保と事故への配慮
3: 野外体験活動における現場留意事項
4: 野外体験活動における準備等周辺事項
5: 専門性の考え方
6: 到達または発達保障の目標

1: 総則

1-1. 定義

野外における体験活動保育（以下、野外体験活動とする）とは、施設の敷地外を活動の場所とし、散歩など軽度の活動を除き、事前に「野外体験活動保育計画」【＊】を作成して行う保育をいう。

1-2. 対象児

1. 3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラスを対象とする。
2. 対象児未満であっても、はだし保育や感覚保育、食事・衣服・運動など、野外体験活動につないでいく保育（日常活動）を念頭におき、発達は連続しているとの認識にたつ。

1-3. 目的【キリスト教保育に適った表記→＊】

1.（五感）生得的五感【＊】をより育み、知的発達を促す。
2.（生命）いのちと触れ合い、美と躍動と調和を体験することで畏敬の念【＊】を育み、向上をめざす意欲を身につける。
3.（共感）ひとは野生のいのちとともにあり、互いに共感し分かち合い、多様な価値を受けいれられる心を養う。

1-4. 「指針・要領」との対照

野外体験活動はその成果について、対照を可能とし、確認できることとする。

1-5. 障がい児への配慮

障がいの属性にしたがって、目的が効果的に達せられるよう配慮する。

【＊】「野外体験活動保育計画」の最小必要項目……時間配分、安全確保留意点、到達目標
【＊】キリスト教保育に適った表記
1.（五感）　神様から授けられた五感に感謝し、五感をより育み、知的発達を促す。
2.（生命）　いのちと触れ合い、美と躍動と調和を体験することで畏敬の念を育み、神様とともにある歓び、向上をめざす意欲を身につける。
3.（共感）　ひとは野生のいのちとも神様に守られ、互いに共感し分かち合い、多様な価値を受けいれられる心を養う。
【＊】生得的五感……たとえば「五感を鍛える」の場合、五感は後年になって取得すると捉えられそうだが、これを退け、五感は生得的とする。生まれながらに備わっている五感を、減退させることなく、個々に応じて、その発達を保障したい。
【＊】畏敬の念……「感動する」と同意。

2: 安全の確保と事故への配慮

2-1. 安全の確保と事故への配慮

1. 下見は必ず行い、危険箇所を確認する。
2. 携帯電話の電波が到達しない場所を確認する。

2-2.「軽度のケガ」の定義

野外体験活動を行うにあたって、「軽度のケガ」を次の条項で定め、「軽度のケガ」を超える事故を防ぐように努める。

2-2-1.「軽度のケガ」は、次にあてはまることとする。

1. すり傷、切り傷、刺し傷、打撲傷。これらすべてに

「軽い」という形容詞がつく。携行している水、救急用品で初期の手当てが行え、医療行為とならない程度のケガをさす。
2. 手足の部位に限る。
3. 開放的なケガは出血の少ないこと、開放的でないケガは痛みの少ないこと。
4. 木登り、フジづるでぶらんこするなど、自然物をつかっての遊びについて、十分な安全確保をとった上での行為で負ったケガで上記の項目に該当する範囲のケガをさす。
5. 鼻血は、直接圧迫法によって5分以内で止血できる程度をさす。

2-3.「軽度のケガ」以上の事故対応

1. 軽度のケガ」でないケガを対象とする。
2. 同伴する指導者の1人以上が、日本赤十字社が行う救急法を受講し認定を受けその有効期間にあること。日本赤十字社が行う幼児安全法を受講しておくことが望ましい。日本赤十字社のほか、消防署、YMCAが実施する救急講習があり、地域・団体の事情に応じて受講されたい。
3.「軽度のケガ」であっても当日を含む2日間の経過観察を怠らない。

3: 野外体験活動における現場留意事項

次項で留意事項（見出し）を列挙する。事項の詳細は個別に必要だが、ここでは定めず、点検の参照とする。

1. グミ、ノイチゴ、ドングリなど野生種の採取やそれらを食べる体験活動で留意すること
2. 山水を飲むなど原体験で留意すること
3. 田植え、稲刈り等、収穫行事のうち労働を伴う体験で留意すること

4. ヘビ、ハチ、野犬、イノシシ、サルなど危険に遭遇する可能性のある体験活動で留意すること
5. 毒草、キノコ、トゲのある植物などに遭遇する可能性のある体験活動で留意すること
6. 落鳥、死骸に遭遇した場合の対応で留意すること
7. 海、川、池、湖沼とその周辺、崖、落石、田畑などで想定される事故で留意すること
8. 気象現象の急変、地震等の遭遇、高温・低温に関して留意すること

4: 野外体験活動における準備等周辺事項

4-1. 服装、携行品の標準

通年で、帽子、長袖シャツ、長ズボンを原則とし、肌を露出しない。夏の暑い時期については半袖・半ズボンを認めるが、2時間以内の活動とし、直射日光を可能な限り避ける。服装を薄着としたときは、軽度のケガであっても、ケガの防止、事故の防止に努める。

4-2. 交通安全指導および交通事故の回避に努める。

公共交通機関利用時、貸切バス使用時は、交通道徳やマナーを身につける。信号機のある交叉点だけでなく、道路歩行時のルールを身につける。

4-3. 田園や山野等で出会った人たちに挨拶をして気持ちのよい時間をつくる。

5: 専門性の考え方

5-1. 専門性の考え方

野外体験活動保育を行うにあたって、動植物または自然領域の専門的知識あるいは技能を指導者に求めない。求

められる専門性は、幼児教育に沿うものであり、領域「環境」のみならず領域を横断して総合的見地に照らす。

5-2. 言葉（語彙）の獲得を目標に立てることが望ましい。
体験を定着させるには言語化が必要で、過度な誘導をしないよう配慮しながらも、積極的な表現を期待したい。

6: 到達または発達保障の目標

6-1. 共感は、評価を一様に定められない。
幼児の発達は、幼児の心身が自然に対して共感することにより促される。野外体験活動保育は共感を生じさせる活動であり、人為的でないことから、到達目標の設定や評価を一様に定めることはできない。

6-2. 共感の効果（成果）をみるには、指導者の誘導を最小限に控えることが肝要である。

6-3. 到達または発達保障の目安（例示）を事項にあげる。
1. 自然の音（鳥など動物の声、水や風の音）をきくために静かにできる。
2. 休息をとる目的に適した体位がとれる。
3. 空を見上げる体位をとることができる。
4. 衣服が汚れてもむやみに嫌がらない。
5. たとえばダンゴムシをみつけるためにひっくりかえした石をもとにもどせる。
6. 流れる小川に足をつけることができる。
7. いきものを自然に返すことができる。
8. みつけた（発見した）よろこびを友達に伝えようとする。
9. 危険回避、安全確認を行おうとする。
10. 日常活動で、野外体験活動の影響が反映されている

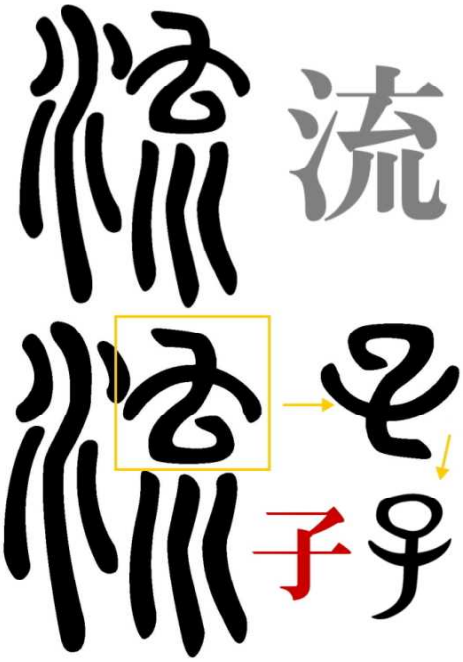
と思われる活動がみられる。

6-4. 評価の方法

到達の度合いについて、数値化は困難だが、ある体験に対応させて、「5 よくする　4 することがある　3 する場面があった　2 あまりみられない　1 みられない」のように評価することは可能かもしれない。

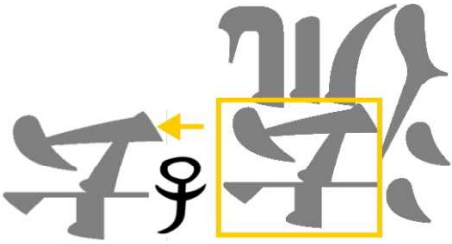
以上　―― 野外体験活動保育マニュアル ――

漢字（白川静）で考える子育て



左は、よく知られる漢字の、もとのかたち。漢字は、何か？

「流」から黄枠を取り出してみる。これを天地逆転すると「子」になる。「流」の漢字には「子」が含まれている、ということだ。



「流」を逆さにすると、「子」は、もとにもどる。

白川静（1910-2006）
1899年、中国で発掘、発見された甲骨文字は、漢字の起源解明を大きく発展させた。白川はその研究に生涯をかけた。

左を「とつ」と読む。「育てる」の「育」にも「とつ」がある。

「子」を逆さにした象形文字だ。

育は、「とつ」＋「月」があわさってできている。「月」は部首の名前としては「にくづき（肉）」で「からだ」を表す。

『常用字解』
白川静が編んだ
漢字の成り立ち字典

左は「いく」と読む。「育」のもとの字。「毎」は母親の姿。その母親の後ろに、生まれ落ちる子どもを意味する。「育」と「毓」は、子どもが生まれることを表し、どちらも「うむ、そだてる、そだつ」の意味がある。

※白川静『常用字解 第二版』より。

もう一度「流」をみてみよう。象形文字の「子」が逆さで描かれていることは、もうわかるだろう。そこで、緑色で表した部分を考えてみる。これは、髪の毛。生まれおちるときも、流されるときも、子どもは逆さに表し、そこに髪の毛があるということだ。それも、「髪の乱れた」様子だ。生まれたときも、川に流されるときも、髪は「乱れている」というその象形になる。

『常用字解』から「流」の説明を以下に引用する。
――古代には洪水で水が氾濫するとき、人の死体が流されることが多く、水死体がうつぶせに浮かぶことを氾（はん／うかぶ）、仰向けに浮かぶことを泛（はん／うかぶ）といい、水中に没している子を上から救おうとしている形が浮である。また古代には生まれた子を水に浮かべてみて、養うかどうかを決める習俗もあった。

「保育」はどうか？

素人目には、「人」＋「子」は想像できる。ところで、白川静の説では、人＋子＋「褓」とある。「褓」を「むつき」と読む。生まれてきた子どもに着せる産着（うぶぎ）とある。象形文字「子」の直下にある「ノ」に似たかたちが褓を表すという。いくらなんでも「ノ」を「むつき」と判じるのは素人にはわからない。人＋子＋「ノ：産着」ということだ。金文でみると、それらしい産着が描かれているようにも思える。『常用字解』の要点は次のとおりだ ―― 祖先の霊をよりつかせる（乗り移らせる）ための衣であり、霊を守る衣でもあった。霊を守る儀礼を保といい、「たもつ、霊をまもる、まもる、たすける、やすんずる」などの意味に用いる。

ところで、抱いているのだろうか、おんぶしているのだろうか。おんぶしているようにみえるが、定かでない。「人」について「おんな」という先入観を排除するにしても、誰に背負われているのだろうか？

次の象形文字は、何に見える？

『常用字解』によると ―― 妊娠して腹の大きな人を横から見た形で**「身」**となる。
「孕」（はらむ）は大きな腹の中に子がいる形。
「包」（つつむ）も腹の中に胎児のいる形。

さて、授かった子どもに名前をつけるため、儀式をとりおこなうことになる。

左が「名」の象形文字。「夕」＋「口」。赤色部分を「サイ」と読む。顔の一部分**「くち」ではない**。神への祈り文（祝詞／のりと）を入れる器の象形である。

は、
口（くち）ではなく、
器（うつわ）

―― 子どもが生まれて一定期間すぎると、祖先を祭る廟（みたまや）に祭肉を供え、祝詞をあげて子どもの成長を告げる名という儀礼を行う。そのとき、名をつけたので、「な、なづける」の意味となる。（『常用字解』）
「夕」は「祭肉を供え」とあるように、肉を表す。
※《夕方の暗やみで自分の名をなのる》と解説し、「名」のなりたちとする辞書が多いが、これは最早 誤りということになる。

そして、最後に……。
「害」の旧字は、タテの線がもっと下に突き出て「口」まで達していた。神聖な器 に刃先を突き立て、これを害した。 は「害」の旧字だ。そして、象形は だ。「害」とは、そんなにも恐ろしい漢字だった。

北風と太陽

北風と太陽がどちらが強いかで言い争いをした。道行く人の服を脱がせた方を勝ちにすることにして、北風から始めた。強く吹きつけたところ、男がしっかりと着物を押さえるので、北風は一層勢いを強めた。男はしかし、寒さに参れば参るほど重ねて服を着こむばかりで、北風もついに疲れ果て、太陽に番を譲った。

太陽は、はじめは穏やかに照りつけたが、男が余分の着物を脱ぐのを見ながら、だんだん熱を強めていくと、男はついに暑さに耐えかねて、傍（かたわら）に川の流れるのを幸い、素っ裸になるや、水浴びをしにとんで行った。

中務哲郎訳『イソップ寓話集』岩波文庫 1999年

メモ書き「いのちに出会う保育」
ひち・じんそ（山田利行）2021年3月31日発行　私家版 非売品
インクジェット印刷（水ぬれ注意）配布数183：2022.1.31